クロノス～時の支配人～

修羅道 梅夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クロノス～時の支配人～

【Ｎコード】
Ｎ５６５６Ｆ

【作者名】
修羅道　梅夜

【あらすじ】
自在に時を操れる男『時の支配人』の大神時人。その能力を使い、仲間とともにある『大きな事』を計画する・・・・・。

序章

その男は最強である。何よりも優れている。その男自身もそう思っている。

『自分は神よりも上の存在だ』と

今、その男はチョコを食べながらニュースを見ている。見ているニュースの内容は、ある殺人

を犯した男が、三日間の逃走劇の末、捕まったというニュースだ。

男は笑った。

自分以外を全て愚かに感じたからだ。

そのニュースを小さな部屋で見ている男三人と女一人の計四人。この四人が物語の中心であ

る。そして、この物語の始まりはその、神よりも優れている男のこの一言から始まった。

「『大きな事』しようぜ」

最初の犯行

都心は眠らない。それは人も同じである。自由に遊ぶ者。仕事をする者。様々な人間の交錯する街。その街の某警察署で二人の男がカメラと睨めっこをしていた。

「どう思いますか？この映像」

白鳥は、部下の田辺の言葉に耳を傾けず一心不乱でその映像を見続けている。終わっては巻き戻してまた最初から。それを何十回と繰り返している。

「おかしいですよね、やっぱり」

田辺も改めて映像を見る。その映像は都内にある東帝銀行の事件現場で、時間は夜の九時。金庫前の録画映像である。金庫の前には警備員が扉の両脇に一人ずつ立っている。この金庫前の防犯カメラは計三台。その中で、このカメラだけが犯行の終始を収めている。警備は万全。しかし昨夜、この金庫に入っていた現金が全て盗まれたのだ。それは大問題だが、もうひとつの問題があった。それこそが白鳥と田辺が真剣に見ている原因なのだ。

この映像の中の一部にそれはある。これに気付いたのは白鳥と田辺だけ。

その問題とは一人の男が映像に映ったところから始まる。男は黒いロングコートで背は大きめで長髪。それが映像で分かること。金庫に向かって歩く男に警備員の一人が近づいた直後、いつの間にか警備員が倒れたのだ。そして、もう一人の警備員も男に近づいただけで、倒れてしまった。そして、金庫を開けて中へと入る。そして出てきたときには大量のカバンを持っており、堂々と歩いて映像から消えた。異変があるのは映像の左下に表示されている時間だ。警備員二人が男に近づいて倒れるまでの間。男が金庫に入りカバンを持ち出てくるまでの間。その間だけ、時間の表示は動かなかった。まるで時間が止まったように。それ以外では正常に動いている。しかし、その三つだけ、確かに時間が止まっている。

「厄介になりそうだな」

白鳥は頭を掻きながらイスにもたれ掛かる。田辺に茶、と乱暴に命令をしてタバコを吸う。

男は思い返していた。昨日の出来事を。この銀行の金は俺が頂いた。誰も俺が犯人だとは気付くことはない。気付いたとしても捕まることはない。自信はある。街の電光掲示板には、俺が主役のニュースが流れている。通行人も盗まれた現金の額を見て足を止める。その中を犯人である俺は堂々と歩く。これは始まりに過ぎない。おれの、これからを考えると笑いが止まらなかった。

仲間と仮初の姿

私立・赤羽大付属学院高等部。都内屈指の有名進学校にして生徒数二千名を超えるマンモス校。進学校であるが、スポーツが盛んで全国大会出場をする部活動も数多く存在する。学年ごとに学習棟が別れており、特別教室や総合実践室などの専用棟も存在する。生徒と教職員も寮生活をしており、完全なセキュリティで生徒と教職員の安全を守っている。部活動では、専用野球場。人工芝サッカーグラウンド。ラグビー場。テニスコート。ラクロスなど、屋外活動をする部全てに専用グラウンド、屋内スポーツでは一つの部に一つの体育館が設置されている。文化部でも同様に一つの部に一つの部活棟が存在する。このように全てが規格外の高校に籍を置いている男は仲間と共にある文化部を拠点として使っている。その文化部が『茶道部』である。

部活動内容としては「お茶の世界に関心を持つ」これは表面的だ

けであり、本当の目的は、
男のするべき『大きな事』の拠点ということだけである。

男は一番乗りに部室に入ったつもりだった。しかし、もうそこにはアキラと聖児がいた。

「なんだよ、ビリかよ」

男は残念そうに定位置のイスに座る。この男こそ主人公である。

大神　時人　十八歳。地面まである金色の長髪と真紅の瞳が特徴の問題児。「自分が最強」という思考が常に頭にある。制服の背中部分に金で模った時計の刺繍が施されている。袖丈が半分しかなく、着丈が異常に長く、ふくらはぎの部分まである超特徴的な制服を着ている。シャツにも様々な刺繍が施されていて、時計やギリシア数字、ローマ数字などといったものまで刺繍されている。とにかく外見が派手なので一目見たら忘れられない存在である。容姿端麗。博

学博識。スポーツ万能。非の打ち所のない人間である。

「時人、昨日の金はどうした？」

時人に最初に質問したのはアキラだった。

天王寺　アキラ　十八歳。時人の幼馴染。青白い髪とメガネで端麗な顔つき。武士の家系に生まれ、幼い頃から剣術を学んでおり、剣道部部長。誰もが尊敬する生徒の模範として生徒会にも在籍している。

「そうだぞ、時人。独り占めするなよ」

横槍を入れるのは聖児だ。

北条院　聖児　十八歳。幼馴染で時人と同じく問題児。赤色のオールバックで黒のメッシュをいくつか入れている。ピアスやシルバーアクセサリー等も好み、大量につけている。制服を着ておらず、いつも私服で学校に来ている。

この三人には学院側も頭が上がらない。それほど驚異的な存在である。

「大丈夫だ。ちゃんとここにある」

そう言って、時人はロッカーのひとつを開けた。その中はロッカーではなく、通路になっていた。

「付いてこいよ」

アキラと聖児は言われるとおりにその通路を時人の後に続いて歩く。その通路の先は、大きな部屋になっていた。天井も高く、奥行きもある。全てが黒を基調とした色になっており機械も数多く設置されている。機械の光や不気味な音だけがこの部屋を支配していた。

「なんだこりゃ？」

「秘密基地だ」

聖児の質問に当然のように答える時人。見た目はたしかに秘密基地だ。部室から繋がっている

とはいえ、ここには目が行き届かないだろう。

「ここに、盗ってきた金やら宝石を保管する。そのほか様々なこともここで行う！」

「なるほど、確かに見つかりにくいな」

アキラは改めて時人が真剣なのを確信する。そして、部屋の中で動くものを発見した。

「誰かいるのか？時人」

「あぁ、水華だ」

時人が手招きで呼んだ女の子が姿を現した。

井伊奈月　水華　十八歳。　身長が１４２ｃｍしかなく、子供のような外見をしている。肩まで伸びた茶髪で髪飾りを付けている。一言で彼女を表すと「天才」だ。とにかく時人でさえも考えていることが理解できない。

「水華には、ここの管理をしてもらうことにした。俺たちのサポートと」

時人はそこで言葉を止め、あたりを見渡している。何かを探しているようだ。

「どうかしましたか？時人さん」

時人のすぐ後ろに女の人が立っていた。水華ではなく、別の女性だ。

「アネモネ、どこにいたんだよ」

「水華様の下着を・・・・・」

その言葉を遮るように水華がアネモネの顔面を殴る。しかし、アネモネの顔には傷ひとつ付いていない。

「要らんこと言うな！バカ！」

すっかり機嫌を損ねた水華。必死に誤るアネモネ。だが、アネモネの表情は変わらない。

アネモネ＝ルィ＝スカーレット＝ヴァンドール　三歳。アネモネは水華の作ったヒューマノイドである。水華が身の回りの世話をさせるために作ったらしい。しかし、高い身体能力や飛行能力などどうでも良いオプションも付いている。表情の変化や感情表現が苦手らしい。

時人、アキラ、聖児、水華、アネモネの五人は元の部室に戻って今回の作戦について話を始めた。今回のターゲットは全国的に有名な宝石店である。そこを狙

うにあたって時人からある
提案があった。
「いいな、それ」
「乗った」
アキラも聖児も賛成している。水華はそのことはすでに知っている
様子で何も言わない。
「でだ、今回は俺一人で行こうと思っている」
それから時人は楽しそうに考えた計画を話し始める。実に単純で、
それでいて完全に安心でき
る作戦がそこにはあった。

ショータイム

未だカメラ映像の時間表示の謎を解き明かそうと孤軍奮闘している白鳥。ここを離れるつもりはない。この謎を解くまでは。だが、その決心は以外にも簡単に破られた。それは田辺が急いでドアを開けたことから始まった。

「白鳥警部。来て下さい！」

田辺は急いでいる様子だった。映像に集中している白鳥は田辺を見ずにこう言った。

「今、忙しいんだよ。後にしろ」

「その映像の犯人から犯行予告の手紙が来たんです」

「なんだと！」

すぐさま立ち上がり、田辺の後を付いていく。

「これです」

白鳥、田辺のほか五人の部下でその手紙を見る。手紙の内容はこうだった。

『私は東帝銀行強盗の犯人である。いまだ捕まえてくれない諸君ら

に感謝する。さて、この手
紙を出したのは他でもない。これは犯行予告状だ。明日の午後十時。
東帝宝石店の宝石をすべ
て頂く。それだけだ。都内の警察官を総動員することを勧める。し
かし、意味がないだろう。
これは劇だ。どれだけ私を楽しませることが出来るかというショー
に過ぎない。君たちの活躍
に期待している、市民の安全を守る警察官諸君。
追伸　第二の予告　私は堂々と正面玄関から侵入する。そして、君
たちの見ている前で宝石を
頂く。これは絶対だ。信じるか信じないかは君たちの自由だ』
内容は挑発的。しかし、東帝銀行の強盗犯と言うなら話は別だ。白
鳥はすぐに明日のための準
備に取り掛かった。

夜九時五十分。東帝宝石店の前には白鳥と田辺が厳重警備を敷い
て待ち構えている。総動員

してこの宝石店を警備している警察官たち。あの予告状通り、銀行強盗と同一人物ならそれ相応の警備だろう。

「まだ来ませんね、警部」

時間は刻一刻と迫っている。しかし、一向に来る気配は無い。再び、予告状の文面を思い出す。『意味がない』『これは劇だ』など、どれも白鳥を挑発するには十分だった。その熱に押されて本部もこれほどの警備を任せてくれている。それもあるが、東帝銀行の金を全て奪った犯人が相手だからでもある。絶対に捕まえる。白鳥の心にそれ以外はない。

「諸君、こんばんは」

そんな言葉がどこからか聞こえた。だが、その声の主はどこにも見当たらない。声だけが辺りに響いている。まるで天から聞こえているような、集音機を使ったような声。

「これほどの警備。感謝する。私もうれしい限りだ」

「どこだ！姿を現せ！」

白鳥は拳銃を取り出し、周りに向け始めた。ちょうど真正面、白鳥はそこに違和感を覚えた。

何かが動いている。そこに拳銃を向け、照準を合わせる。暗い闇の中、何かが確かに動いてい

る、近づいている。

「さぁ、ショーの始まりだ」

その言葉の直後、白鳥の目の前に白金で薄気味悪い仮面が現れた。しかし、そこには仮面以外

に何もない。ただ、仮面が宙に浮いているだけだった。

「止まれ！おい、あそこにライトを当てろ！」

白鳥の指示で数個のライトがその仮面を捉えた。そこにはひとつの影があった。それは仮面を

かぶった影。黒いコートを羽織っており、黒いズボン、黒い靴。全てを黒で染めて、仮面だけ

が白金である。それゆえ仮面が浮かんでいるように見えたのだ。白鳥は感覚で分かっていた。

この仮面の男こそがあの予告状の差出人だ。少しの沈黙の後に仮面の男が動き出した。白鳥の

拳銃にも全く怯えることなく、徐々に近づく。それにつれて他の警察官も銃を構えて向け始め
る。
「冷静な判断だ。指揮官よ。お前がここの頭のようだな」
仮面は低い声で言い白鳥に向かって拍手を始めた。拳銃に怯えることなく、大人数に怯えるで
もなく、ただ、面白がっていたのだ、この仮面の男は。
銃声が二回、夜の闇に響き渡った。刹那、白鳥は恐怖を感じた。それを感じたときには遅か
った。体が動かない。動かすことが出来ない。自分の意思とは違い、別の人間の体のようにま
ったく言うことを聞かない。それは仮面の男を除いた人間全員だった。遠くに見える通行人で
さえも止まっている。さらに驚くことに仮面の目の前で白鳥が打った銃弾が空中で止まってい
る。その仮面の男が銃弾に軽く触ると銃弾は地面に落ちた。
「ゆっくりと見物しているのだな。犯人が悠々と闊歩するのを」
仮面の男はゆっくりと宝石店の中へと向かった。すこしでも顔を覚えようにも体はおろか、顔

も瞳も動かすことが出来ない。

数分後、黒い袋を抱えた仮面の男が出てきた。その中にはこの東帝宝石店全ての宝石が詰まっている。それを見ることしか出来なかった白鳥の心は怒りに染まっていた。

「さようなら、警官の諸君」

仮面の男はビルの間に姿を消した。その後、しばらくしてから体の自由が利くようになった。

そして、周囲５ｋｍを警察官全員で仮面の男を捜した。パトカーを駆使しても空からヘリで探

しても見つからなかった。結局また、捕まえることは出来なかった。

不穏なる影

翌日。テレビではあの犯行を放送以降、かなりの注目度がある。たった一人の強盗。しか

も、盗むのは全部。ひとつの落ち度もない。そして、証拠も残さない。それが注目される理由

だった。対策室で体を休める白鳥。しかし、心は休まることを知らない。あの仮面の男を捜す

までは休める気はない。署長からは、この事件の全てを任されている。だが、さすがに今回は

どうしようもない。体が動かずに、何も出来なかった。その時、田辺がドアを大きく開け入っ

てくる。

「警部、証言が出ました」

「どうだった？」

田辺は白鳥から事件開始時にある指示が出されていた。それは二人の警察官を使った作戦でも

あった。

「やはり、体が止まっていた時、時計の針も動かなかったようです」

その作戦は二人の警察官に時計だけを見るようにとの指示をしたのだ。その二人にはそれぞれ
アナログ時計と針時計を渡した。
「両方とも微動だにしなかったのか？」
「そのようです」
そうなるとますます分からなくなる。いったい、どうすればこんな事が出来るのだろうか？白
鳥の心の中にある仮説が生まれた。それは
『時を止める』
あの仮面の男は時を止めることが出来るのではないのだろうか。それだと思うとそれ以外感じ
られずにはいなかった。そう考え込んでいるとドアを叩く音がした。ドアは白鳥の返事を待つ
ことなく開いた。そこには黒いハットを目深に被り杖を持った男性が立っていた。明らかに警
察関係者ではないことは分かっていた。
「おい、お前。関係者以外立ち入り禁止だぞ」

田辺が近づこうとした時、男性の杖が手元を離れて田辺のアゴに向かって飛んでいった。勢い
が強く避けられなかった田辺は、杖がアゴに直撃してその場に倒れる。白鳥が立ち上がろうと
すると男性はそれを手で止めた。
「銀行強盗と宝石強盗の犯人を捕まえる手段を知っていますよ」
その言葉が白鳥の心を捉えた。
「どういうことだ？」
「協力しましょう、ということです」

時人とアネモネは歩いていた。夜、繁華街も賑やかになる頃。二人はある場所へと向かって
いる。とある場所で二人は立ち止まった。地下に階段が伸びている。目的の店はその先だ。階

段を下りて、扉を開ける。中はバーカウンターで少ない照明ではあるが、店内を彩る数々の
光。バラードが響き渡りカウンターには一人の老人がいるだけだ。
「なんじゃ、お前か」
「客じゃなくて残念だな」
この老人の名前を時人は知らない。古くからの友人だ。主に何でも知っている。時人が知らな
いことでも。この老人に聞いて解決できなかったことはない。時人がカウンターのそばに行き
用件を言おうとした。その口を老人は止めた。
「客じゃなくても何かを頼んでもらおうか」
明らかに不機嫌そうな顔をしている時人。この老人は頼み事ひとつに注文ひとつをとる。
「アブサンひとつ」
「私はカルーア・ミルクで」
アネモネはヒューマノイドであるが、食生活は人間と同じである。だから、酒なども飲める。
二人の注文した酒がカウンターに置かれる。酒を飲み、改めて話を

する。

「これでこれを売ってくれるか？」

渡したのはメモと、二つの事件で手に入れた金と宝石。その全てをここに持ってきたのだ。メモにはある二つの名前が書かれている。

「ちょっと待っておれ」

老人は奥へと姿を消した。その間、残りの酒を口の中に入れる。アネモネはまだゆっくり飲んでいる。

「アネモネ、美味しいか？」

「はい、とっても」

あの老人の出す酒はうまい。それも道楽だろう。老人のすること全ては道楽である。奥から出てきた老人は縦長のカバンを持ってきた。

「両方、あったぞ。それとお釣りじゃ」

そう言って老人は札束を二つ出した。

「これだけか？」

「これでも安いほうじゃ」

「わかったよ」

時人はアネモネに金を渡してカバンを持ち、去ろうとした。そのとき酒代のことを思い出した。

「ジジィ。酒はいくらだ？」

「もう貰ったよ」

どうやら金の中にすでに酒代は入っていたようだ。

「それと、時人」

帰り際。老人に呼び止められる。

「遊びなら、やめておくんじゃ」

時人は鼻で笑った。

「人間は常に下に生まれる。どんな人間でも。しかし、神は違う。常に上に立つのだ」

「誰の言葉じゃ？」

「俺だ」

店を出て、帰る途中でカバンの中身を開ける。中には日本刀『村正』とS＆W・M29が入っていた。どうやら本物のようだ。それだけを見て時人は満足した。カバンを閉めて再び歩き出す。これでもう大丈夫だろう。全ては整った。あとは本格的に始動するだけだ。今までのは序章に過ぎない。

最初の刺客

白鳥は男から全ての事情を聞いた。犯人の事。この男の事。すべてが理解できない。

「お解かりいただけましたか？」

白鳥から声は出ない。下を向いて考えているだけだった。

この男の話はこうだった。

この世界には一般人のほかに異能人と呼ばれる一種の特殊能力が使える人間が存在する。その人間は一般人と混じって世の中で生活しているため、一般人には気付かれることはない。公に能力を使うことはなく、普通に暮らしている。その異能人の中でも一番危険で最強とされている能力がある。

「それが時の支配人です」

時の支配人とは、すべての時を自在に操ることが出来る。その言葉どおり時を支配できる能

力。そして、その時の支配人を護衛・監視するために彼らの様な異能人だけの機関がある。それがＭＡＲＢＬＥである。その機関が監視しているのが、時の支配人である連続強盗事件の犯人である。彼が許可なく勝手に能力を使用し、一般人に危害を加える可能性が高いと判断したため、警察と共同でこの時の支配人を捕まえるというのである。

「こちらとしては、是非力を借りたいのです。お願いします」

「わかった。協力しよう」

「その言葉を聞くことが出来て助かります。では早速」

そして、ＭＡＲＢＬＥと警察のこれからについて話が始まった。

学校からの帰り道。村正の試し切りなどで遊んでいたため、夜八時を回ってしまった。後ろに人の気配を感じる。近からず遠からず、物影に隠れながら、こちらの動きを見ている。

「誰だ。出て来い」
確信はあった。後ろを見ずに隠れているであろう物影に向かって声を発する。その物影がこちらに近づいてくる。後ろをゆっくり振り向くと、若い紳士風の男が立っていた。手には杖を持っている。
「はじめまして、時人さん」
男は深々と頭を下げた、その次の瞬間。男の杖が時人の顔を横一閃に通り過ぎた。男は杖で時人に切りかかったのだ。しかし、時人は寸前でかわしきった。ほう、と軽く感心する様子の男。避けた事が不思議なくらいに。
「よく避けましたね？」
「知らない人間が名前を呼んだら変だろ？何の用だよ」
男は体勢を立て直し、帽子を深く被りなおした。
「ＭＡＲＢＬＥです。あなたを殺しにきました」
そのＭＡＲＮＬＥの単語を聞いたとき、時人の顔が変わった。

「たいした自信だな。なぜ俺を殺す？」

男は大きくため息をした。そして、杖の先を時人に向ける。

「あなたは目立ちすぎだ。監視する我らが君を『必要悪』と感じたのだ」

どうやら、銀行や宝石店で強盗をしたことが俺だというのがＭＡＲＢＬＥに気付かれたのだ。

「どうやって殺すんだ？この俺を。ＭＡＲＢＬＥなら俺の能力知ってるよな？お前も異能持ちか？」

「そうです」

「どんな能力だ？」

「今から分かりますよ」

男は杖を地面に向かい突いた。男の周りにある無数の石。それが浮き上がり空を浮遊している

のだ。そして、杖を時人の方へと向けた。空に浮いていた石たちが一気に時人に襲い掛かってきた。時人はかろうじて全ての石を避けることに成功した。

「それが能力か？」

「ええ、『モノを操る』能力です。大小関係なくね、体力は要りますが」

「面白いな」

時人は服の胸ポケットに手を伸ばした。しかし、男はそれを許さなかった。時人に一気に近づき、寸前のところで杖が時人の首元を捕らえた。

「時は止めさせない」

時人は耳を疑った。コイツは、俺の能力の、弱点に気付いている。

「君の能力の弱点は知っているよ」

やはり知っているようだ。そうなると時人はかなり不利になる。

「一回、時を止めるのに、時計をひとつ壊さなくてはならない。そうだろ？」

当たっていた。当たっているため、時人は何も言えずにいた。ＭＡＲＢＬＥは犯行時の全てのカメラを警察から借りて研究した。そして、知ったのだ。警察程度の一般人には決して分からないと思い、堂々と壊したのが仇となってしまった。

「もう、終わりだ。楽に殺してあげよう」

男は無数のナイフを取り出した。時人の顔が一気に青ざめる。

「さっきの石が、ナイフに変わる。避けられるかな？」

男と距離を取る間もなく、ナイフが飛んでくる。必死に避ける時人。ナイフは危険だ。刺されば死ぬだろう。時人は何とか全てのナイフを避けることが出来た。瞬間、時人の頬を何かが通り過ぎた。そして、頬に一線の小さなキズができ、そこから血が流れる。ナイフだ。後ろから一本、飛んできたのだ。

「さすがに避けられないか」

得意げに話し始める男。時人の耳には届いていない。時人は頬を指で少し触り、見る。

血。真っ赤な、綺麗な血。

時人の眼が変わった。今までの余裕のある眼ではない。狂気に満ちた眼だ。

「お前、俺を傷つけたな。俺に、血を出させたな」

ゆっくりと男の方へとあるく時人。

「今度は、それだけでは済まないぞ」
男は先程の倍近くのナイフを取り出した。それを空に浮かして切っ先を時人に向ける。
「これで終わりだ」
杖の号令とともにナイフは時人をめがけて飛んでいく。時人に刺さる瞬間、ナイフは止まった。それと同時に、男の動きも止まった。
「ど、どういうことだ。体が動かん」
「俺が、『時』を止めた」
男は時人の回りを確認する。しかし、どこにも壊れた時計の破片はない。見逃したわけでもない。まったく分からない。
「お前のせいで、台無しだ」
時人は動けない男のモモに銃を突きつけ、銃弾を放つ。銃声が響き、血が噴出す。しかし、男は叫び声を上げない。上げられないのだ。
「時よ、動け」

時人のその声で全ての時が動き出す。先程、時人に向かっていたナイフは地面に転がってい
る。男はモモを抑えながら、時人を見上げる。
「どうしてだ、なぜ時を止められる」
「お前の言っていたことは、全てウソだ。時を止めるのに、時計は要らない。俺にとって時を
止めるのは呼吸と一緒だ。他人に気付かれるほど、愚かな能力ではない」
時人はため息をひとつ。そして、再び喋り続ける。
「せっかくのウソがお前で台無しだ。いいか、あれは罠だ。お前みたいに勝手な勘違いをして
勝った気になる奴を倒したかったんだよ。もっと楽しめたのに」
更に時人の顔が狂気に満ちる。殺意さえある顔だ。
「情報が漏れないように、お前を殺す」
その言葉がウソ偽りのない、本当の言葉と悟った男は傷ついた足を引きずりながら逃げようと
する。時人は少し笑った。
「もう無駄だ。いくら逃げても、時からは逃げられない」

時人は男の飛ばしたナイフを拾い集める。その間にも男は逃げ続ける。少しずつ少しずつ。歩
くたびに足に激痛が走る。しかし、この男のことを伝えなければならない。その思いだけが男
を動かしていた。時人と男の距離は徐々に離れる。恐怖で、声が出ない。民家に逃げ込むか、
人が来れば助かる。その直後、前方に人の気配を感じた。これで助かる。そう、思ってしまっ
た。だが、そこから男の記憶は飛ぶ。

「『時』よ。止まれ」

その言葉で全ての時が止まった。先程までは、身体的に止めるだけにしていた。今度は総てを
止めた。肉体も、精神も。時を止められた人は、止められてから動くまで、何もなかった様に
感じるのだ。死ぬことも同じである。死ぬまでの動作を見ずに死ぬことになるのだ。ゆっくり
と男に近づく時人。男の全身に向かってナイフを投げる。そのナイフは男の全て一寸前で止ま
る。

「時が動き出したとき、お前は何も知らずに死ぬ」

時人はゆっくりとその場から立ち去る。角を曲がった後で時の支配を中止する。

「時は、動き出す」

その言葉の後、悲鳴と、叫び声がこの近くに響き渡った。

狂炎に染まる街

いつものように学校へと登校する時人。昨日のことが気にいらないらしく、今朝からチョコ

を食べている。時人はチョコが大好物で、冷静になる時にもよく食べている。六枚目の板チョ

コを食べ終えてやっと落ち着いた時人。そのまま部室へと直行する。部室にはいつものメンバ

ーが揃っている。

「大事な話がある。聞いてくれ」

時人は昨日のことを全て皆に話した。ＭＡＲＢＬＥが活動を始めたこと。狙われていること。

しかし、誰も驚くことはなかった。

「まぁ、分かってたことだしな」

聖児はさらに余裕が出ている様子だ。

「おもしろくなるな」

アキラも同様だった。

「あんなに派手にしてればバレるわよね」
水華は呆れた顔をしている。アネモネはなぜかヤル気である。
「これからどうする？」
「もちろん、続行だ」
時人の頭の中にもＭＡＲＢＬＥの事など、どうでもよかった。ただ、退屈しのぎにはなる。そう考えているだけだった。
「これからの計画には、聖児とアキラ、アネモネが必要になる」
三人の表情が変わった。ついに本格的に動き出すときが来たようだ。
「もう遊びはいいのか？」
「あぁ、充分だろう」
「では、いいのだな」
「よろしく頼むぜ」
机の上にこの街の詳細な地図を広げる。そこにひとつずつマーカーを付けていく。
「聖児はここ。アキラはここ。アネモネはここだ」

「お前は？」

「それ以外を全てだ」

時人は自慢げにそう言った。部室のカーテンと窓を開ける。眼下に広がる風景。見慣れたこの

街。この全てを支配する。そう思うと、笑いさえこみ上げてきた。危険は承知だ。しかし、危

険あってこその退屈しのぎ。

夜の街は真紅に染まっていた

様々な悲鳴が交錯する

逃げる人々、物珍しそうに見る人々

サイレンが色々な方向から聞こえる

ビルの屋上からそれを見る時人

その顔は笑みで溢れていた

突然の宣告

警察署では緊急会議が行われていた。事態は最悪の方向へと向かっていた。今朝の一面はこの記事がどの新聞も独占していた。

『都市部の全銀行で爆発火災発生』

昨夜、最初の爆発は午後七時。突然の大爆発が起こった。それに続くかのように次々と連続して爆発が起こる。その数およそ十。すべての銀行が爆発火災により全壊している。会議室には白鳥を始めとする上層部の者達が集まっている。皆、事の重大さに気付いているようで誰も喋ろうとしない。その沈黙のなか、ドアが開き、一人の男が入ってくる。

「お待たせしました。ＭＡＲＢＬＥの逢瀬と申します」

逢瀬は今回の事件について話し始めた。

「この連続爆発はあの男の、クロノスの仕業です。十もの銀行を全焼するのに、三十分も掛か

っていない。」

クロノスとは時人の呼び名のことである。『時の神』にちなみ名付けられた。

「そして、もうひとつ。この件は、我らＭＡＲＢＬＥに任せて欲しく、参りました」

「どういうことだ！」

白鳥が怒声を上げる。しかし、逢瀬は冷静に答える。

「貴方達の手では負えない、ということです」

その言葉に反論するものはいなかった。白鳥も黙っていた。

「クロノスがここまで行うとは予定外でした。すべてを我らに任せてくれませんか？これが詳しい資料です」

逢瀬の出した紙には今後、警察署における全ての権限をＭＡＲＢＬＥに委託する、といった内容である。

「ふざけるな！こんな事が許されるか！」

白鳥は机の資料をばら撒き、逢瀬の胸倉を掴み、壁へと叩き付けた。逢瀬は動じずにいる。

「貴方達凡人が手に負える相手ではない。それは貴方が一番分かっているのでは？」

そうである。クロノスの件は責任者である白鳥が一番よく分かっているのだ。自分達ではどうすることも出来ないのを。

「では、これにて失礼します。よい返事を期待していますよ」

彼らに残された道はひとつしかなかった。

逢瀬はある男の前にいた。

「そうか、よくやった逢瀬よ。ご苦労だった」

「して、クロノスはどう致しましょうか？」

男は考えているように手を回したり、首を鳴らしたりしている。

「私が行きましょうか？」

「いや、デクテットのお前が行くことはない」

「分かりました」

「そうだな、こいつ等を行かせよう」

男は逢瀬に四人の名簿を渡した。どれも実力は中の中である。

「当て馬ですか？」

「まぁ、そういう、ことだな」

男はそのまま眠りについた。逢瀬はその名簿を取り、その場を去った。

宵の宴～時人～

部室に集まった五人は今朝からニュースを見ている。自分たちの犯した連続爆発放火事件の特番などが放送しているため、テレビに釘付けだ。過激なテロリストや異常な思考の持ち主など、諸説様々な専門家の意見。全て的はずれであった。

「まさか、高校生がした事だとは分からないだろうな」

聖児の言うとおりだった。絶対に分かるはずがない。しかし、時人には気がかりなことがあった。

「警察は何の動きも見せないな」

アキラの言葉で何かを思い出した時人はテレビの電源を消した。

「警察はＭＡＲＢＬＥに吸収されたのだろうな。だから独断で行動できないんだ」

「なるほど、ということは行動できない今がチャンスか？」

聖児の言葉を首を振ることで否定する時人。

「ＭＡＲＢＬＥは警察と共同しているから俺たちが複数人で行動していることを知っているだろう。だから一旦、計画は中止だ。そして、ＭＡＲＢＬＥを迎え撃つ」

「迎え撃つ？どういうことだ」

聖児はよく分かっていない様子だった。

「ＭＡＲＢＬＥは慎重な連中だ。表舞台にはまず出ない。闇を狙い俺たちを葬るつもりだ」

「確かに、暗殺のほうが殺り易いだろうからな」

「おそらく、最初は雑魚が来る。そこで俺たちの戦力を測るのだろう」

なるほど、と聖児もようやく理解できたようだ。

「今後の目的は『ＭＡＲＢＬＥの全滅』だ」

時人はすでに刀を抜いていた。そして、目の前の男と対峙している。夜のビル街、そこの一番高いビルの上に二人はいた。男との距離は約十ｍ。最初に動いたのは男だった。一気に時人との距離を縮め銃を撃つ。時人は自分と銃の間に手を出し、銃弾の時を止めた。すぐさま間合いを取ったが、すぐ後ろに気配を感じた。振り向きざまにその気配を刀で切りつけた。そこには何もいなかった。

ただ、少し後ろで男が空中に浮いていた。ゆっくりと、降りてくる男。

「世良慎次。能力は『浮遊』だ」

空を自在に動ける能力。時人は大きく息を吐く。そして、深く考え込む。この男を倒す方法を。

「クロノスよ。俺と戦ったのが運の尽きだ」

「クロノス？」

「貴様の呼び名だ」

時人は少し微笑んでいる様子だった。

「いい呼び名だな。気に入った」

世良には自信があった。自分の考えた仮定が全てうまくいっている。奴の時を止める能力は一定範囲内しか止められない。だから、奴が時を止めようとした時に一気に空へと飛び、逃げる。それが成功しているのだ。勝機はこちらにある。今もこうして範囲外にいるわけだから、ここから銃殺が一番いいだろう。世良は銃を構えて数発、時人に向けて撃った。

「時よ、止まれ」

銃弾だけが止まると思っていた世良は驚愕した。自分の体も動きを止めたのだ。そして、うまく飛行することができずに、そのまま屋上へと叩きつけられた。叩きつけられた後も体は動くことはない。世良は考えた。なぜだ？自分の推測通りに範囲からは出ているのに。

「時を止める範囲は無限だ。それにどんなにお前が離れていようとお前だけの『時』を止めることが出来るからな」

その直後、世良の体は自由が利いた。慌てて立ち上がる世良。叩きつけられた衝撃で銃を手放してしまった。殺される。それが世良の頭を支配していた。

「逃げろ」

「何？」

「俺から逃げてみろ。ただし十秒後、俺はお前の『時』だけを止める。そうなればお前の負けだ」

一方的につき付けられたゲーム。しかし、世良の生き残る道はそれに従うしかない。

「よーい、スタート」

一気にビルを駆け抜ける世良。空を飛べるので一瞬で時人との距離を離す。そのまま、遠くまで逃げ続けたい世良だったが、ビルに足をつけた途端、体が動かなくなった。そして、目の前には時人が立っていたのだ。

「お前の負けだ。これから死ぬお前に最後の種明しだ。俺は触れたモノ全ての『時』を止められる。だから、お前だけの『時』を止めることが出来たのだ。その証拠だ」

時人は世良の目の前に時計を差し出した。その時計は普通に時を刻んでいたのだ。

「お前だけがこの世界の『時』から置いていかれる」

銃を世良の額に突きつけて微笑む。

「俺と戦ったのが運の尽きだ」

銃声が響き、世良は倒れこむ。時からは開放された。しかし、世良はもう動くことはなかった。

宵の宴～アキラと聖児～

時刻は同じ頃、アキラと聖児、アネモネも別の場所でＭＡＲＢＬＥの刺客と対峙していた。アキラは町外れの廃工場にいた。追跡してくる敵と戦うために敢えて人気の無いところへと来たのだ。

「賢明だな。人を巻き込みたくないのかな？」

「人に見つからずにお前を殺せるからな」

アキラは手に持っていた刀を抜いて切っ先を敵に向けた。

「それは俺も同じだ」

敵も刀を抜き、戦闘体勢に入っている。

「金島太一。始末を開始する」

金島は勢いよくアキラに切りかかる。アキラはそれを素早く交わし、

肩に一太刀入れる。しかし、それに反応した金島は刀によって

それを阻む。二人の刀は交錯し合い、どちらにも一太刀入れることが出来ない状態にある。

金島の横の大振りを瞬時に体を仰け反らせ交わしたアキラ。その一瞬、金島は体勢を崩した。明はその隙を見逃さなかった。間合いを詰め、首を狙う。首に刀が触れたとき、アキラは違和感を覚えた。刀がそれ以上進まない。力を入れても全く動こうとはしない。

「これがおれの能力だ」

金島はアキラの腕を切る。しかし、アキラはそれを間一髪交わすことが出来た。

「『硬化』　それが俺の能力。無能なお前には到底勝ち目はない」

『硬化』体の一部から全身に至るまで自由に硬くすることが出来る。しかし、アキラは平然としていた。

今のアキラにはただ目の前の敵を倒すことしか考えていない。たとえ、それが誰であろうと、時人の邪魔をする奴は誰であろうと許

されることはない

「時間も無い。早めに終らせる」

アキラは水の入ったペットボトルを取り出した。そして、その水を刀にゆっくりとかけていく。

「覚めろ、『花鳥風月』」

アキラは何もない空間を刀で横一閃に切った。すると、刀についていた水が三日月状になり金島に向かっていく。その数四。首・右腕・胴・左足に飛んでいる。

「なんだ？」

金島は何も分からずに刀すら構えずその三日月状の水を見ているだけだった。それが金島の体に触れた時、金島の目の前は真っ暗になった。

アキラの目の前には首、右腕、胴、左足がそれぞれ切断された金島の死体が転がっていた。残っている刀の水を拭き取り、そして、金島の死体に火をかける。

アキラは終始、その人の焼ける匂いのする綺麗な炎を見ていた。

『花鳥風月』水を操る能力。水を付着させた物の能力を得る。

聖児は目の前の敵に戸惑っていた。或いは殺すのを躊躇さえもしている様子だった。歳は俺と同じかそれ以下。それでいて華奢な女の子。七瀬美紀はどうみてもＭＡＲＢＬＥの刺客とは思えない。

能力も無い『アウター』なら手短に終らせよう。

『アウター』異能組織ＭＡＲＢＬＥの中でも能力を持ち合わせていない一般人。これといった特徴もない。いわば戦闘員だ。

身体能力が高く、能力ではないが何らかの特技を持ち合わせている。

「お嬢ちゃん、あんたを殺したくない。帰ってくれないか？」

その言葉の後に聖児の腹に激痛が走った。七瀬は聖児にボディブローを入れたのだ。あまりの激痛にその場でひざを付く聖児。

「黙れ、私はお前を殺すだけだ。お前の都合など関係ない」

聖児はよろめきながら立ち上がる。すぐさま、七瀬の拳が飛んでくる。聖児は交わすだけで精一杯だった。

「安心して死ね。他の仲間も全員私が殺してあげるから」

その言葉の次に飛んできた拳を聖児は受け止めた。聖児はその拳を思い切り握り潰した。

断末魔が響き渡る。骨は砕け、皮を破り、外に出ていた。絶え間なく流れる血。指は全てあり得ない方向へと曲がっている。七瀬の顔は気持ちの悪い汗が流れ続けていた。

「俺の『能力』は殺すか、生かすか、その二択しかない。ただ、お前は前者だ」

聖児は七瀬の頭に手を置く。力を入れずにそっと触るように。

「何をする気だ」

七瀬は恐怖で体が動かない。

「俺は、出来ない事を言う奴が大嫌いでね。アンタ程度に殺される俺らじゃないよ」

聖児は手に力を入れた。単純な力ではなく、『能力』の力を。

先程まで動いていた七瀬の死体は黒く焦げていた。もはや原形をとどめていない。タバコを出して、指を鳴らした。人差し指に火が灯りタバコにつける。煙を空に向かい吐き出す。その煙が風に流されていく。それと同じように七瀬の死体も塵のように風に流されていった。

『時人のためだ』

これが聖児の口癖である。

『発火』炎を自在に操り全てを焼き尽くす。火の付いたものが無くなるまで消える事の無い炎。

宵の宴〜アネモネ〜

アネモネは考えていた。なぜこの人は無駄だと分かっていても私に立ち向かうのだろう。アネモネは動かなかった。

それはマスター水華の命令でもあったからだ。ＭＡＲＢＬＥの刺客の戦闘能力を測るためらしい。けど、この人は弱い。

測るに値しない、アネモネはそう思っていた。何度、銃で撃っても、ナイフで切りつけてもアネモネにキズ一つ付かない。先程から

通信しているマスター水華の反応も薄くなってきた。良い情報も何一つ持っていない『アウター』に構っているヒマはない。

「もういいや、アネモネ。始末して」

「了解しました。マスター」

動き出すアネモネ。その表情はいつものままだった。アウターである清水忠志は後ずさりしかできない。アネモネが人間ではないことに気付き始めたのだ。清水の心には絶対に逃げ切ることを考えているのだ。どんな手を使っても逃げ切る。

「マスター、どのように始末しますか？」

「一番簡単な方法だ。ただし、誰にも見つかるなよ」

アネモネの脳内で『簡単で、一番静かな方法』を探す。見つかったのはひとつだった。それを実行するには近距離でなければいけない。アネモネが徐々に近づこうとしたその時、清水は手榴弾を手にしており、アネモネに向かって投げつけた。

閃光とともに豪快な爆音が辺りに木霊する。清水は逃げることを忘れ、煙と炎に包まれた風景を見ていた。甲高い笑い声さえも出てしまう。それほど快感だったのだ。

アネモネは生きている。その煙と炎の中からゆっくりとした歩調で、確実に清水に迫っていた。傷は一つもない。

しかし、服が破けてしまってボロボロである。アネモネにはそのほうが許せなかった。清水は固まって動けなかった。人間でもなく爆発では死なない。化け物にさえ見えてきた。

「来るな、化け物め」

清水の顔はまるで恐怖そのものを見ているかのような顔だった。その瞳にはアネモネしか映っていなかった。それはアネモネも知っていた。

アネモネは清水の首元に針を一刺しする。その針からは水華が合成した毒が注入されていく。

清水は静かに息を引き取った。

アネモネはしばらく破けて服を見ていた。すこし、悲しい気持ちになる。自分が化け物呼ばわりされてしまった。それも悲しかっ

た。けど、それよりも。

「時人さん、ごめんなさい」

せっかく時人が自分のために選んで買ってくれた服。それがボロボロになってしまった。込み上げてくる涙はない。

けど、悲しい感情はそこにはあった。

アネモネは、『悲しみ』という感情を知った。

男は思っていた。クロノスのこと。『時の支配人』のこと。いずれも順調に事が進んでいる。男の口元が少し緩みだす。

男の部屋に、逢瀬が入ってきた。

「全員、死にました」

「そうか、まぁ予想の範囲内だな」

「やはり、私が・・・・・」

「そうだな。考えておこう。下がれ」

逢瀬は部屋を後にした。クロノスは強い。しかし、まだ我らには敵わない。あのお方のもっとも信用するテクデットには遠く及ばないだろう。ただ、気掛かりなのは他の三人だった。誰も情報にはなく力も未知数だ。データも何もなかった。三人ともクロノスと同

じくらいの実力だ。それだけはわかる。

空からの贈り物

休日の街は実に賑わっていた。そんな中を時人とアネモネは歩いていた。新しい服を買いに来たほか、必要な物を揃えるための買い物でもある。時人にとって計算外な行動だった。こんなにも早くＭＡＲＢＬＥが襲ってくること。それにより急遽、部室に身を隠すことにした。全員で行動したほうが良いという時人の判断だった。

「ありがとうございます。時人さん」

「気にするな、服ぐらい買ってあげるから」

「はい」

アネモネの心は変わり始めていた。少しずつ、少しずつ。ゆっくりと

空を見た時人は異変に思った。何かがある。空中に。そして徐々に落下している。

「アネモネ、あれが何か分かるか？」

アネモネの眼がその落下物を捉えた。それを見たアネモネの口からはこう告げられた。

「ヒト、です」

「本当か？」

「はい、女性ですね。気を失っているようです」

改めて上を見直す時人。しかし、空には飛行機や飛んでいるモノ自体なかった。青空が澄み渡っている。とにかく、助けるのが先決だ。時人はアネモネの背中に乗った。

「とりあえず、助けるぞ」

「ハイ」

アネモネは体を地面と平行にして走りだす。そのスピードは自動車

を簡単に追い越すほどのスピードだった。それでも追いつきそうになかった。厄介なことに、アネモネもそうだが、落下してくる女性を一般市民が気付き始めたのだ。騒ぎ始める人々。アネモネの飛行に頼りたいが、アネモネよりも重くなると飛べなくなるから危険がある。

「アネモネ、十分だ。ありがとう」

時人はアネモネから降りて近くのビルの壁を縦に一気に駆け上がった。

自分が落下する『時』を極限まで遅くする。そうすることにより、壁を駆け上がることが可能になる。

『時』を戻し、ビルの屋上に立つ。タイミングを計り、落下してくる女性に飛びつく。女性を抱えることに成功した時人。そして再び、『時』を遅くすることにより、ゆっくりと地面に着地することもできた。これ以上、一般人の目に付くのは危ない。アネモネと

一緒に女性を連れて部室へと向かった。

「どうするんだよ、この娘を」

ベッドに寝かせて、改めて話し合う五人。桃色の奇麗な長髪。耳にイヤリング、髪飾りなどを付けている。どこから来たのか、なんで空から落ちてきたのか、どんな人物なのか、まったくわからない。

「お嬢様らしいな。この服装からして」

推測でわかる事だった。真っ昼間からドレスを着ており、豪華な髪飾りも付いている。イヤリングも相当高価なものだからかなりの富豪者だろう。事態が急速に動いたのはテレビで流れたあるニュースだった。

「緊急速報です。フランスの資産家であるマリューセル家の一人娘のマリア・マリューセルさん（十八）が行方不明になったという情報が入りました。本日午後、搭乗中の飛行機から突然、姿を消した模様で現在も捜索が続いております。特徴は桃色の長髪。翡翠色の髪飾りです」

一同が目を丸くして流されているマリアという娘の映像を見た。まるっきり、ここで寝ている娘と同じであった。桃色の髪も髪飾りも同じだった。

「おい、マジかよ」

明らかにヤバそうな雰囲気がそこにはあった。しかし、時人の顔だけは相変わらず笑顔だった。時人はマリアの胸元に目がいっていた。

隠れて見えないが、首飾りもしているようだった。それが特に気になっていた。それを間近で見るために顔に近づこうとした時、

マリアが目を覚ました。目が合う時人とマリア。ニッコリ笑って挨拶した時人の頬に強烈なビンタが入る。

「きゃあああああああああああああああああああああ」

部室は荒れ放題だった。あれから、マリアが乱心状態となりひと暴れしてしまったのだ。

「落ち着きましたか？マリアさん」

アキラが紅茶を差し出す。それをゆっくりと飲むマリア。

「何があったんだ？話してくれるか」

一向に話そうとせず、周りを見ているマリア。何かを思い出したように唐突にマリアが質問を始めた。

「ここは日本？」

「そうだ」

「日本のどこ？」

「東京だ」

「そう、よかった」

安堵のため息とともに胸を撫で下ろすマリア。何に安心したのかはさっぱりわからない。

「なら貴方達、ここを案内して頂戴。前から来てみたかったのよ、東京」

「何言ってんだ。あんた捜索ねが・・・・」

聖児の言葉を強引に止める時人。口に人差し指を立てて黙るようにと指示をする。俺に任せろと言わんばかりに。

「かしこまりました、マリアさん。しかし、その服ではいささか目立ちます。どうか庶民の服へと着替えることを勧めます。こちらも気兼ねなくエスコート出来ます故」

「わかりましたわ」

「水華。着替えを」

低姿勢の時人。無駄に口が達者になるときは何か企んでいる時だと全員が知っている。何をするかは時人に任せる。あとは時人の指示に従うだけだ。

「トキヒコ」

夜、観光の疲れもあってか全員が眠っている時、マリアは屋上へと出ていた。冷たい風がマリアの体を冷やす。薄着のまま出てきたマリアは少し身震いをしている。その背中にコートを被せる。時人だ。

「気が利くのね。それにしても、奇麗な夜景。また連れて行ってね」

マリアはうれしそうに笑った。時人も少しはにかむ程度ではあったが、久々に体を休めたという実感があった。そして、気になることもあった。それを聞くためにここに来たのだ。

「何が目的だ？あんたを見ていると帰る素振りが全く無い。何かから逃げているようにも感じた」

街を案内している最中、やけにそわそわしたり、周りをキョロキョロと見たりしていた。見慣れない風景を見ているようにも感じた

が、顔が笑っていないのに不信感を覚えた。マリアは時人を見る。先程とは違い、真剣な顔つきでこちらを見ている。いつまでも隠し通せるわけはないと思っていたマリアは決心して言うことに決めた。

「私のことご存知かしら？」

「資産家の娘だろ。テレビで大々的に放送していたぞ」

「えぇ、三人娘の末っ子として生まれてきたの」

それからマリアは自分のことについて話し始めた。

「幸せな家庭だったわ。母を早くに亡くしたけど、父も二人の姉も優しかったわ。でも」

マリアの顔が暗くなる。

「父が病に倒れて遺産相続の話が出てきたの。長女のアウラ姉さん

が相続するはずだったのに、父は私に全財産を相続させたの。親類一同、もちろん姉さんも大反対よ」

「どうして、あんたなんだ？」

マリアは掛けておいた首飾りを外して時人に差し出した。豪華な飾り付けを施されている。時人の予感通り、これが関連している。

「父の死後から五十日後に正式な遺産相続が行われるわ。その時にこの首飾りを持っている者が遺産を相続できるの」

「それで、気に食わない姉たちが首飾りを手に入れるためにお前を襲う訳だな」

「もう襲われたの！飛行機から落ちたのも姉さんの仕業」

マリアの眼に涙がたまっていた。よほど酷かったのだろう。

「それを渡せば、襲われることないんだろ？」

「これは母の形見よ。素直に渡せないわ。それにあんな姉さんに渡すくらいなら。実の妹を殺そうとした人なんかに」

その直後、人の気配を感じた。こちらの様子をどこからか見ているようだった。時人はマリアの手を握りマリアを強引に近づかせた。

「な、何するの！」

思わず赤面するマリア。さすがお嬢様。こういう事に関しては素人である。暗闇から影が現れる。数は三人。囲まれている。マリアは何も分からずに動揺しているようだった。

「ヒマ人め」

三人の男たちは黙って戦闘態勢に入る。ナイフなどを構えて徐々に近づいてくる。時人はまったく動じない。しかし、マリアは恐怖

に駆られていた。

「何よ、あいつら。ねぇ、何とかしてよ」

「大丈夫だ。任せておけ」

一斉に男たちが襲いかかる。それと同時に時を止める時人。動かない男たちを触らぬようにロープで男たちの手足を拘束した。その後、三人とも殴り、意識を失わせた。

「何が起こったの？」

マリアはよくわからない様子だった。当然だ。時を止められていては何が起こっているのかなどわかる筈がない。しかし、そこでマリアはあることに気付いた。

「ねぇ、あなたも『時』を操れるの？」

「え？」

マリアは確かにそう言った。なぜ一般人がこの能力について知っている。時人は訳が分からなかった。

「なんで、それを」

「少し前に、東洋人をボディガードに雇ったのよ。その男も『時』を操れたから・・・・」

「名前は！」

マリアを壁に押し当て声を張り上げる時人。

「『トキヒコ』」

その名前が、時人の過去を思い出させる。あの男が生きている。

夜光祭にて

あの夜から二日が経った。あの後に、マリアから来たる五十日後まで護衛してほしいをお願いがあった。マリアからしてみれば当然だった。以前にボディガードをしていたトキヒコは何度もマリアの窮地を救ったという。トキヒコと同じ能力を持つ時人を信頼するのは筋が通っている。この件に関しては皆も了承してくれている。今も部室で水華と一緒にいる。

時人たちも一応、学生である。学校には来ているし授業も受けている。聖児だけは例外である。アキラは生徒会にも在籍しているため普段も真面目に勉学に励んでいる。アネモネもヒューマノイドであることを隠しながら暮らしている。アネモネは男子にも人気があり、告白も度々ある。水華をマスターと呼ぶため男子の間では召使いやメイドという妄想が広まっている。しかし、校内では時人といつも一緒にいる。それも水華の命令でもある。聖児は頼りないし、アキラは真面目すぎるからしい。そのおかげで変な噂も絶

えない。

赤羽大付属学院高等部には生徒の保護者でも入ることのできない厳重警備になっている。その中で最も近寄りがたい存在である大神時人の在籍する茶道部には滅多に人が来ないだろう。そして今日は、この学院三大名物のひとつ、夜光祭の準備で忙しいのを加えて、この学園から出さない限りマリアは決して襲われることはないだろう。時人と水華の考えだった。

夜光祭とは、クリスマスの日、十二月二十四日に生徒会が企画する独自の文化祭である。クラス単位ではなく、専用体育館「高貴館」という場所で行われる行事で、パーティのように談笑を楽しみ、演劇部・軽音楽部・吹奏楽部などの文化部の催し物もある。その他様々なイベントがあり、それは毎年生徒会によって決められている。開催時間は夕方から。

聖児は準備などせず、いつもの仲間と遊んでいた。夜光祭には興

味はなかったが仲間の一人、相原藤二がこの夜光祭で前々から好意を抱いていた小笠原宮子に告白すると仲間内に教えてくれた。それを協力するために計画を立てている。浮かれ気味の聖児の携帯に着信が鳴る。水華だ。

生徒会の準備もラストスパートに入っていた。あと二時間で開催される夜光祭。アキラも準備に追われていた。

「先輩、チェックお願いします」

アキラは最高責任者を任されており、最終確認に余念がない。それは飯尾香奈も同じだった。アキラに憧れて入った生徒会。辛くてもアキラが居るからここまで出来たと思っている。夜光祭ではカップルが出来やすいということもあり、やる気の入る香奈。今日でこの関係を断ち、新しく恋人という関係を作る決心をしていた。そ

んなことは知る由もないアキラに着信が入る。水華だ。

部室に五人とマリアが集まった。要件はまだ分からない。水華がすぐ来いと電話で言った後、一方的に切られたからだ。

「何の用だ？」

「ＭＡＲＢＬＥが来ている。それも大勢だ」

「まさか、バレたのか？」

「その可能性が高い」

よりによってこんな時期に襲ってくるとは余程のヒマ人なのだろう。時人の頭にはまずそれが浮かんだ。危険はない。むしろ良いヒ

マつぶしだ。

「詳しい人数は？」

「まだ分からない。けど結構な数だよ」

「関係ないな。全員殺せばいいだろ？」

「一般生徒に被害が及ぶ可能性を考えろ」

そんな中、時人の考えはいたってシンプルだった。

「まぁ、状況に応じて個々で行動しよう。それが得策だ。下手に作戦考えて、それがバレたら元も子のないからな」

ＭＡＲＢＬＥは表向きには警察に協力している組織。それほど派手に動くことはない。

「マリアには一応、隠れてもらっておこう。何が起こるか分からない」

「ええ、わかったわ」

そして、これから長い長い夜が始まる。

悲劇の序曲

時間は遡り、逢瀬はまた男の元にいた。今度はアリオットと鮫島もいる。

「君たち三人に、中隊を組んでもらおう」

中隊とは、テクデット一人につきアウターが五人。それが三組で構成された隊のことである。

「なぜ私たち三人なのですの？」

アリオットは不服そうに尋ねた。

「おれも同感だ。一人でもできるぞ」

鮫島も反論する。

「君達の『能力』のおかげでクロノスの所在を見つけることが出来たのだ。だから、チャンスは平等だ」

男はあくまでもこの三人が協力することを願っているようだ。

「それに、クロノスは強い。三人でも足りるかな？」

男が『強い』という単語を口にしたのを逢瀬は初めて聞いた。それほど脅威と言えるのだろう。そして、男は挑発しているようにも聞こえた。我の強いテクデットが三人集まっている。アリオットと鮫島は簡単に挑発に乗って中隊で行くことに了承した。

夜光祭は無事開催された。時人はアネモネと。聖児は仲間と飲み食いをしてはしゃいでいる。アキラは香奈と共に生徒の喜ぶ顔を見ている。成功してよかったとアキラは思っていた。水華はいつも通り部室で高貴館から漏れている光をじっと見ていた。

笑いあう生徒。いつもと違い勇気を出して異性と共に過ごす生徒。

変わらない仲間と過ごす生徒。様々な願いがこの夜光祭には詰まっているのだ。聖なる夜の一大イベント。香奈は依然、アキラと手を繋ぐことさえできずに後ろについているだけであった。

「センパイ。これどうぞ」

アキラに飲み物を差し出したのは同じクラスの女子だった。運動部に所属しており活発な女の子。私とは全く正反対の女の子。ちょっと気後れ感がある。

「先輩は、ああいう活発な娘のほうが好きですか？」

聞いた後で恥ずかしくなった。自分でも何を言っているのか分からなくなってしまった。

「いや、大人しいほうが好きだな。香奈のような」

それを聞いて一気に心臓が飛び跳ねた。顔も熱くなるし手には汗が滲んできている。

「せ、先輩。あの・・・・・その・・・・」

香奈の声はけたたましい騒音に掻き消された。そして、照明が落ちる。生徒の不安な声が飛び交う。パニック状態とでも言うのか、

混乱していて何が起こっているのかアキラにも分からない。誰かを助けなければならない。その思いがあったが、香奈の手を握るこ

としかできなかった。

そして爆音が響き渡った。

最強の十人組

どれくらい時間が経ったのだろう。目が覚めてから学校が滅茶苦茶に破壊されているのに気付いた。外から見る限り、高貴館も半壊状態にあった。聖児は廊下を歩いている途中、爆音に襲われた。しばらく意識が飛んでおり、目覚めるとそこには仲間の姿が見当たらなかった。仲間を見つけるべく、瓦礫などを退けてみる。しかし、見つけることは出来なかった。

「誰も殺さないよ。君たち、五人以外はね」

後ろを振り向くとＭＡＲＢＬＥらしき人物が五人立っていた。

「お前たちの仕業か」

「あぁ、お前たちの居場所を突き止めることができてな。それにここにはマリューセル嬢もいるんだろ？」

その言葉を吐いた後、五人の男の前まで聖児は迫っていた。殴りかかったが、男達は反応が早く、距離を大きくとる。

「お前の能力『発火』のことならわかっている」

どうやら聖児の能力までも敵にはバレている。それなら時人やアキラ、アネモネも危ない。そう悟った聖児。急いで、四人を探すことにした。

「待て、どこに行く気だ？まだ終わっていないぞ」

「もう終わっている」

五人の胸には火が灯っている。聖児は指を鳴らした。その瞬間、男たちの体を火が覆いつくした。火の音はいつも心地よい。しかし、こいつらの言動には引っかかるモノが多かった。考えたところで何も浮かばないと思い、四人を探そうと走り出した。その聖児の目の前に男が立っていた。

「流石だな。『発火』ね」

「誰だ？」

明らかに先程の男達とは感じが違う。能力者のようだ。

「デクテットが一人。アハト・リッター。鮫島幸介だ！」

男はいきなり突進して、掌は何かを掴むように構え、腕を上に振り上げた。聖児の体を五本の線が刻まれる。鮮血が吹き出した。腹から首元にかけて切られた。片手で押さえて息を整える。不敵に笑う鮫島。

「まさか『デクテット』が出てくるとは予想外だな」

デクテット。ＭＡＲＢＬＥ内でも特に能力が優れている者達を集めた十人組。序列が決まっていおり、それぞれ我が強く、単独行動を主にとっている。

「改めて自己紹介だ。鮫島幸介。能力は『爪刃』だ」

『爪刃』自身の爪を極限まで硬化させ、斬りつける。

単純だと聖児はおもった。それだけに個人の身体能力に左右される能力だ。奴はアハト。つまり八番目の実力。倒せないことは無い。

聖児は手を横の広げ、指先に神経を集中させる。そして、手を顔の前でクロスさせ爪先にかけて尖るように火を付ける。

「火装。爪の型」

それは鮫島に対する挑発とも思えた。

「上等だ！いいぜ！気に入った！」

二人の爪が交錯する。

卑劣なる愚行

アキラも時を同じくして、テクデットの一人。アリオットと対峙していた。場所は崩壊が進んでいる高貴館。そのステージ上で闘っている。しかし、アキラはすでに息を切らし、体中に傷が目立つ。アリオットと出会う前まで必死で瓦礫の下に埋まっていた生徒達を一人で助けていたのだ。

「さて、これから少しゲームをしましょう」

アリオットは嬉しそうにアキラに告げた。

「この場所に約三十個の爆弾を仕掛けておきました。起爆させるスイッチもあります。貴方が私の攻撃に耐え続ければ貴方の勝ちですわ。但し、負けた場合は」

アリオットは見せしめに一つの爆弾を起爆させた。その威力は大きく、高貴館全体が揺れるほ

どだった。不安に駆られる生徒達。泣き出す生徒もいる。

「それともう一つ、もし私に危害を加えようとすれば生徒を殺しますわよ」

生徒一人ひとりの後ろにはアウターらしき男達が立っていた。全員で十人以上いる。

「いいだろう」

アキラはそれに応える事しかできなかった。手に持っていた刀を捨て、ただ立つだけだった。

「それでは、ゲームスタート」

アキラの腕にナイフが刺さる。激痛が腕から全身を駆け巡る。刺された場所からは紅い血が滴

り落ちる。

身体や四肢だけではなく、顔にまでナイフの切り傷が無数に付いているアキラ。それでもな

お、アリオットは止めようとしなかった。アキラもまた、それに耐え続けている。生徒の中に

は香奈もいた。香奈の眼には明の傷つく姿が目に映る。声が出なかった。けど、涙が止まらな

かった。ほかの女生徒もアキラの無残な姿を見てすすり泣いている。それは男子も同じだっ

た。泣きはせずともやり場のない怒りだけがあった。周りにアウターさえいなければ今すぐに

でも助けに行きたい気持ちでいっぱいだった。

アキラの心に怒りはなかった。生徒の安全を第一に考えるとこれが得策だった。自分がじっ

としていれば生徒は助かるのだ。その思いだけしかない。

「もう、つまらないですわ」

その言葉を機にアリオットはスイッチを押した。再び爆発が高貴館と生徒達を襲う。今度は一

気に五発。先の比ではなかった。床に亀裂が走り、大きく揺れた。

「貴様、約束が違うぞ」

アキラの怒りにもアリオットは冷静だった。

「あら、肉体的にも飽きてきましたし、今度は精神的に痛めようと思いまして」

「それに、マリアさんを捕まえなければならないですしね」

その言葉に違和感を覚えたが、その時すでにアキラの中で何かが切れてしまった。

とうとう屋上も壊れはじめてきた。そして、その破片が生徒の頭上に迫ってきていた。

アウターをすり抜けて、生徒だけを覆うように巨大な氷の結晶の塊が生徒を破片から守って

いた。アキラはいつの間にか刀を持っていた。その刀は美しく光っていた。アキラの『能力』

により、氷を発現させたのだ。

「お前は許されない悪だ」

ゆっくりとアリオットに近づく。アリオットはその表情に怯え、後ずさりをする。アキラの顔

は狂気に満ちている。滅多に見せない顔だった。

「私は女ですよ。女に手を挙げる男がいまして？」

その言葉を笑うかのように胴体を斜めに切りつけた。鮮血が舞いアリオットは悲鳴を上げる。

「悪は殺す。たとえ、女子供老人でも。どんな小さな悪でも、大きな悪でも、殺す。それができなければ時人に合わす顔は無い」

アキラの体も同様に血が出ている。アリオットの比ではない。しかし、時人に対する信念がア

キラを動かしている。

「吸血鬼を知っているか？」

「止めて、殺さないで、助けて」

もはや話しかけるのをアキラは無駄だと思った。アリオットの心臓に軽く刀を突き刺す。致命

傷ではない。刺すことが目的ではないからだ。アリオットは刀を抜こうと必死になっていだ

が、体の異変に気づいた。腕が枯渇している。血がないようにカサカサに乾燥しているのだ。

腕だけではない足も、顔を触ってみるとしわが刻まれていた。断末魔ともとれる悲鳴とともに

アリオットは絶命した。全身の血を抜き取られたのだ。

アリオット・レイントン。ツェーン・リッター。『千里眼法』

アキラは重い体を引きずりながら必死に歩いていた。アリオットの言葉が気になったのだ。

なぜ、ＭＡＲＢＬＥがマリアのことを知っているのかを。嫌な予感のしたアキラは部室へと急

いだ。すこし咳きこんで、口に手を当てる。手には血が付いていた。その後、アキラの意識は

途絶えた。眠るかのようにその場で倒れ込んでしまった。

豪火の雀

聖児は鮫島と互角の勝負を繰り広げられていた。お互いが一歩も引かない状況であった。

「さすが、クロノスの仲間だな。一筋縄ではいかないか」

「なぜ、俺たちの場所がわかった？」

その質問に鮫島はニヤリと笑った。

「俺の、もう一つの『能力』だ」

もう一つの能力。つまり、『双道極地』という能力。

『双道極地』二つの能力を併用している異能者。主に攻撃系と補助系に分かれている。

「もう一つの能力は『追痕』だ。傷を見る事で、その傷を付けた本人の居場所がわかる。まぁ、死体を放置してれば簡単に見つけら

れる」

聖児は死体を燃やした。ということはアキラか時人だろう。厄介な能力を持っている敵がいる。聖児の中に焦りが出てきた。こいつ等はマリアのことを知っている。どうやってか分からないが、部室が危ない。早めに鮫島を倒すことを考える。

肩に鋭く、激痛が走る。鮫島の爪により肩の肉がえぐられた。肩を抑えるが流れる血は容赦を知らない。

「あんまり俺を嘗めるなよ。その気になれば一瞬で殺すぞ？」

聖児の顔はむしろ笑顔だった。ありがたい。久しぶりに本気で戦える。その思いが肩の痛みを感じさせなくなった。聖児はえぐれた肩の部分を自分の炎で焼きはじめる。さらなる激痛が聖児を襲う。

この痛みは自分への戒めだ。今まで足りなかった勝利への飢えと渇きを取り戻すため。この戦いで昔の自分を思い出す。

「クレイジーだな。ますます気に入ったぜ！」

聖児は目を瞑り神経を集中させる。昔から得意だったあの技をするために。鮫島が徐々に近づいてくるが、眼は開けない。集中を高める。

鮫島はこの一撃で聖児を仕留めるつもりでいた。両手に全精力を集めて一気に切りつける。しかし、その爪撃は空を切っただけに過ぎなかった。聖児の姿が見当たらない。消えたように跡形もない。まさか逃げたのだろうか？

「どこだ！出て来い」

「お前の後ろだ」

振り向いた鮫島は目を疑った。聖児は体に火を纏っており、両腕からは翼が生えていた。そして、尾羽のようなものまで生えている。

「火装。雀焔の舞」

体を沈めて腕を大きく広げる。翼が燃え上がるように揺れている。一瞬、それに見惚れてしまった鮫島。それが勝敗を分けた。素早く動いた聖児は鮫島の頭を鷲掴みにしてそのまま地面に叩きつける。その後、聖児は大きく羽ばたき空へと飛びあがる。鮫島を掴んだまま。ある程度上昇したところで滞空して手を前へ突き出す。鮫島は力なく人形のように動かなくなっている。もう死んでいるかもしれない。しかし、聖児には関係なかった。鮫島の体を一気に燃やし空へと投げ捨てる。燃えた鮫島は声を上げることもなく、徐々に黒くなっていった。地面に近づくにつれ、燃えた体は灰へと化していく。地に着くことなく灰は風に流されてしまった。

聖児は雀焔を解放した。その直後、片膝をつく。体への負担が痛みへと変わっていった。慣れない変形炎。立ち上がることなく、その場に倒れ込んでしまう。静かに目を閉じて。

動乱の学園

時人は屋上に向かい急いで走っていた。アネモネも後ろを付いていく。高貴館の爆発後、時人はあることを確かめるために屋上へと向かっていたのだ。屋上へと着き、高貴館を見下ろす。悲惨だった。建物は半壊状態。炎上している場所もある。その、半壊している場所から氷の結晶が見えていた。アキラだ。すぐにそれがアキラだとわかった。それと同時に、あれほどの氷をださければならなかったアキラはそうとう苦戦したということ。アキラの安否も気になったが、それ以上にそこには違和感があった。

警備の問題だった。これほどの大騒動。なぜ、警備員が一人もいない。ここの警備システムは万全だ。それがなぜ作動していない。通常、高等部内での出来事に対してシステムが働き、すぐさま救急車や消防車などが駆け付ける。

高貴館の爆発があってからすでに三十分以上が経過していた。おかしい。なにか作為的なものまで感じる。

「時人さん。なにか、高等部全体に膜のようなモノが張られています」

「は？」

「正方体のような形をしており空中も地面も覆われています。警察との連絡も取れません」

膜。要するに結界が張られている。ここに時人たちがいることはＭＡＲＢＬＥに筒抜けだ。

「クロノスだな」

後ろを向くと男が六人、すでに抜刀しており、戦闘態勢に入っていた。徐々に近づいてくる。時人も迎え撃つ準備に入ろうとした、

その時、アネモネが声を上げた。

「マスター！応答してください！マスター水華！」

「どうした！」

「マスターとも連絡ができません」

まさか、水華の身に何かがあったのか。水華はまったく戦闘向きではない。そのためのアネモネだ。離したのはやはりまずかったのだ。

「アネモネ！水華を頼んだ！」

「はい！」

屋上から飛び降り、猛スピードで水華のいる部室へと向かう。それを追おうと男達も走りだす。その前に立ちはだかる時人。

「あの女の行く場所にマリアとかいうお嬢様がいるんだろ？」

胸騒ぎがした。こいつら、マリアを知っている。なぜ、どこで、どうやって、考えても答えは見つからなかった。見つけようとする前に、男達は一斉に時人に斬りかかった。

時人は珍しく息を切らして、刀の血を拭っていた。後ろには先程の男達の死骸が転がっている。頭の奥が痛く感じる。どうやら連発が効いたのだろう。

時人の『能力』通称『時間支配』

どんなモノにも弱点はあるように、この『時間支配』にも弱点はある。それが多対一の時である。通常、時を止めると術者以外の全てが静止する。それを解くには術者自身が解くか、術者が静止しているモノに触れることで再び時は動く。それは究極に一対一に特化した形とも言えるため、多人数との戦いでは一人一人を確実に仕留めるため、一人につき一回、時を止めなければならない。しかし、その弱点は『時の支配人』にしか分からない。そのため、現在でも最強の『能力』である。

「あらら、全滅かい。もう少しがんばれよな」

その声の主は、いきなり現れた。そして、死骸を叩くなどして死んでいることを確かめていた。身長は高く、長髪。黒のスーツを着ている。

「やぁ、君がクロノスだろ。はじめまして」

「誰だ？名乗れ」

どうせＭＡＲＢＬＥだろう。どんな能力でも倒すしかない。そして、水華の元へ。

「デクテット。フィア・リッター。四法院仁だ。よろしく」

「デクテット。序列四番までお出ましか」

デクテット。まずいことになった。序列四番目まで出てくるとは予想外だ。それに体もそろそろ限界に近づいている。

「そう怪訝そうな顔をするなよ。俺は別に戦いに来たんじゃない。ただ・・・・・」

「ただ？」

「面白くしに来ただけだ」

男は手を叩いた。その音の刹那に爆発が高等部各地で起こった。何十個もの爆弾が一斉に爆発している。地響きとともに建物が崩れ始めてきている。特別棟も学年棟も徐々に壊れ始めている。ただ、まだ部室棟までは爆発が行われていない。

四法院仁はいつの間にか姿を消していた。

デクテットの一人。アイン・リッターのヴァイスは男の元にいた。

「どうかな、ヴァイス。首尾のほうは」

「先刻、逢瀬のほうから連絡がありまして。鮫島とアリオットが死にました」

「そうか、まぁ、いいだろう。犠牲は付き物だ。それより、封鎖してくれたかね？」

「問題なく、万全で御座います」

「わかったぞ。下がれ」

ヴァイスは深く頭をさげ、その部屋から出て行った。

五番目の実力者

アネモネは急いでいた。マスターに何かあれば、それは従者である自分の責任である。部室棟が見えた時、爆発がアネモネを襲った。横で第一棟が爆破したのだ。その衝撃で飛ばされるアネモネ。しかし、すぐさま立ち上がり部室棟を目指す。

部室の前に着いた。そこである異変に気づいた。どうやら先程の爆発ですこし、故障してしまったようだ。視界状態に異常がみられる。腕の調子も悪いようだ。

「クロノスの仲間だな」

扉を開けようとした、その時だった。暗闇から男が現れた。

「誰ですか。それ以上近づかないでください」

「逢瀬光太郎だ。クロノスとマリア嬢に用がある」

それを聞く前にアネモネは襲い掛かった。しかし、その腕は簡単に逢瀬に受け止められた。逢瀬が腕を持ちながら思い切り壁にアネモネを叩きつけた。アネモネは地面に倒れ込む。

「お前は機械だろ。容赦はしない。その部屋に誰かいるのだな」

部室へと向かう逢瀬の足をアネモネは掴む。絶対に行かせてはならない。たとえ体が壊れようとも。逢瀬はその手を掴みアネモネを持ち上げる。そのアネモネの腹部めがけて蹴りを入れる。2～3m遠くまで吹っ飛ぶアネモネ。しかし、それでもまだ立ち上がる。もはや体は言うことをきかない。動かそうにも動かない。けど、水華とマリアは絶対に守る。それは時人との約束でもあるから。

「生身ではないから、簡単には死なないか。なら楽に殺してやる」

逢瀬は手を前に差し出し、アネモネに向かって指を拡げる。

「改めて自己紹介だ。逢瀬光太郎。デクテットの一人。フンフの名を貰い受けたリッターだ。力の序列は五番目。お前を殺す男だ」

逢瀬が『能力』を発動させる。その直後、アネモネを何かが襲う。後方へと吹っ飛び、壁に叩きつけられるアネモネ。体の何かが切れるような音と壊れる音が聞こえ、意識が消えた。

時人が着いた時、眼前に広がった光景を否定した。アネモネが目を閉じて、倒れている。腕も、足も大破しておりいやな機械音が聞こえてくる。そして、目の前の男に照準があった。

「お前だな。アネモネを・・・・・・」

それから先が言えなかった。言いたくなかった。信じたくなかった。だが、目の前の男が元凶だとわかった。それだけで、十分だっ

た。

「『時』よ、止まれ！」

切ることだけを考えた。どことか、どうとか、何も考えず、斬って、殺す。だが、時人の体に何かがぶつかった。壁のように男との間に存在していた。そして、遠くへと吹き飛ばされた。

「『時』を止めても無駄だ。大神時人。その能力の弱点は知っている」

近づきながら冷静にしゃべる逢瀬。完全に見下している。時人にはそれが許せなかった。自分が神であるには見下されてはいけない。常に見下さなければならない。だが、逢瀬に斬りにかかっても何かで弾かれてしまう。

「おれの能力は『色即是空』。空気を自在に操れる。先程からお前に空気を凝縮させて当てている」

懐に忍ばせた銃を取ろうとした時人の手は空気により弾かれ、その衝撃で銃も飛ばされてしまう。時人はかなり疲弊していた。それには逢瀬も気付いている。

「お前は時を止める。しかし、そこにあるものは変わらない。お前が時を止める直前に空気の膜を作る。お前には決して見えない膜だ。それに無意識に触れて、時が動き出す。これが、お前の弱点だ」

逢瀬の服が切れる。時人の刀が胸を切りつけたのだ。しかし、血は出ない。体を傷つけるまでには至らなかった。

「ごちゃごちゃとうるさい奴だ。俺は負けない。絶対に！」

立ち上がり、刀を構える。しかし、剣先は震えている。すでに限界だった。

「無理だと言っただろう。もう終わりだ」

「『時』よ。止まれぇ！」

だが、時は止まることはなかった。一瞬早く、空気の塊を時人の全身にぶつけたからだ。周りの建物を傷つけることなく、時人だけを倒したのだ。

「あっけないな。クロノスよ。その程度か」

逢瀬は再び部室を目指した。もう、誰もいない。クロノスの仲間は五人。アネモネと時人。鮫島とアリオットと戦った男二人もただでは済まないだろう。

これでよかったのだ。犠牲は多いが、マリア嬢を捕まえることもできるし、クロノスを倒した。この部屋の中にもう一人の仲間がいようとも、倒せないわけではない。部室の近くまで来た逢瀬はあることに気付いた。アネモネがいない。先程まで倒れていたあの場所にいない。周りを見渡した。どこにもいない。後ろを振り返ると、クロノスもいなくなっていた。そして、辺りを暗闇が支配し

た。

何が起こったのか、逢瀬には分からなかった。廊下ではなく、自分がどこにいるのかも不明だった。地面がある感覚もない。暗闇に放り投げられた感じだった。

そこで、ある椅子に座った男を見つけた。足を組み、手を組んでこちらを見ている。

「ようこそ、時の地へ」

「誰だ？お前は」

男は少し黙り、また話を続けた。

「時人、君たちの言い方だと『クロノス』かな。よく倒せたね。敬

意を表するよ。しかし、まだ彼は『時の眼』を開けていない。それ故に君は勝てたのだ」

「その、『時の眼』というのがあれば俺は負けていたと？」

「負け、では済まない。死が待っている。必ず」

男は逢瀬の戦い全てを否定しているような言い方だった。

「君はまだ、『時の支配人』のことを何も知らない。君の考えた対抗策など無意味だ。それほど、『時の眼』は強い」

「それほどまで言うのなら、お前の実力を見せてもらおう」

逢瀬は男に近づいた。しかし、いくら歩いても男との距離は縮まらない。

「無駄だ。ここは私の心の中だ。君はただ、私の話を聞けばいい。『時の支配人』について」

それから、男の話は始まった。内容はいたって簡単。ただ、『時の

支配人』について話しただけだ。

「単純に、『時の支配人』は一族だけの能力だ。そして、その能力の奥に『時の眼』がある。それは全てを支配する魔眼だ。どの能力にも決して負けない。その眼には四つの能力があり、そのどれか一つを使用することができるのだ。それは全て最強の能力を持ち合わせている。君も気を付けたほうが良い。時人が開眼するまで、もうすぐだ。私としては楽しみでね。君には時人に近づいてほしくない。だから、ここに呼んだのだ」

「お前は何者だ？なぜ、そんなことを教えてくれる」

「時人と同族だからだ。彼は大事な存在でね。君に殺される訳にはいかない。それに、ここでの事と、時人に関する事を全て忘れる」

「なに！」

「もう、遅い。『眼よ、彼の者に、一時の忘却を与えよ』

その言葉を合図に逢瀬は苦しみだした。頭を抱えて地面を転がりまわる。

「気を失うと、元の世界に帰れる。安心したまえ」

逢瀬は目を覚ました。道路の脇で蛍光灯の明かりに照らされていた。そこで、自分のことを考えてみる。たしか、誰かを探すために、赤羽付属に来たはずだ。しかし、誰を探しに来たのかを思い出すことはない。そして、今まで『時の地』にいたことを。

時人と時彦

部室にいる水華もマリアも眠っていた。そして、満身創痍の時人、聖児、アキラは気を失っていた。そこに男はいた。一人ひとりの息を確かめる。全員無事である。しかし、アネモネは動こうとはしなかった。もう、動けないのである。

男はアネモネに近寄り、頬を触った。

「すまない、時人が迷惑をかけてしまった」

男は涙を浮かべていた。あまりにも非力すぎる時人に対してだ。自分の仲間も守れない奴が自分の弟だと思うと情けなかった。しかし、それももう終わる。

男はマリアに目がいった。やはり、時人の元を訪ねていた。男の予感は的中していた。昔の約束を守ってくれたのだ。今度はこちらが約束を守る番だ。マリアの頭を数回撫でる。

「今までよく一人でがんばったな。もう大丈夫だ、時人が守ってくれる」

その声に反応したのか、マリアは目を覚ました。そして、目の前にいる男に対して涙を流したのだ。

「来てくれたのですね、トキ・・・・」

男はそれ以上しゃべれないように強引に口を塞いだ。人差し指を口に当てて。その仕草は時人と同じだった。

「さようなら」

その言葉で、マリアは再び眠りについた。男は手を大きく横に広げてこう言った。

「『眼よ、彼の者達のみの時を再び与え給え』」

時人は目を覚ました。そこには、聖児・アキラ・アネモネ・水華・マリアの五人全員がいた。皆、心配そうに時人の様子を伺っていたのだ。

「心配したぞ。大丈夫か？」

「あぁ、それより、敵は？」

「全員倒したぞ。もう安心しろ」

おかしい。聖児もアキラも傷が治っている。アネモネも完全に修復されている。

「お前ら、傷は？」

「何言ってんだよ。お前が俺たちの『時』を戻して治してくれたんだろ？」

違う。その『能力』は確かに存在する。しかし、時人にはできない。

時人は否定した。しかし、声には出せなかった。ある一人の男が脳裏に浮かんだからだ。それが確信へと変わったのはマリアの一言だった。

「違うわ！トキヒコが助けてくれたの！私見たのよ！」

「さっきから言ってるけど、誰だよ『トキヒコ』って」

「俺の、兄貴だ」

突然の告白だったが、時人の口からはそれ以外何も出なかった。

遠い昔の記憶。まだ、『時の支配人』ではない頃の時人。そして、時彦。

時彦は知っている。自分の使命を。「自分は影だ」それ以外の何者でもない。

そして、時人が『時の支配人』だから。

夢。いつも見るあのころの夢。時彦は分かっている。これからは俺の仕事。しかし、決して時人の前に出てはならない。自分はあくまでも「影」だから。

時の支配人

大きな屋敷。マリアは時彦と共に庭園を歩いていた。晴彦がここに来てからマリアには笑顔が戻っていた。マリアは遺産相続の話が出てくる前にも不可解な事故により、何度もケガをしていた。しかし、晴彦をディガードに雇ってから事故は起こるものの、ケガなどは一つもせずに今日まで無事でいられている。

「ありがとうね、トキヒコ」

「いえ、お嬢様の命を守るのが仕事ですから」

これからもずっと一緒にいて自分を守ってくれるとマリアは思っていた。しかし、別れは突然訪れた。それは父の容体がおかしくな

った頃だった。その頃になるとマリアは命を狙われる事は少なくなっていた。

「どうしてなの？なんで一緒にいてくれないの？」

玄関先でマリアは時彦との別れを惜しんでいた。

「申し訳ありません。ですが、もうあなたは大丈夫です。一人でも生きていけます」

「ですが・・・・・」

「もし、貴方の身に再び危険が迫ればこの男の元を訪ねてください。きっと貴方を助けてくれます」

時彦はマリアに一枚のメモを渡した。それには時人に関する情報が記載されていた。

「それでは、失礼します」

時彦はその後、マリューセル家を後にした。それから二度と、表の世界に時彦が姿を見せることはなかった。

これがマリアの体験した時彦との出来事。時人にとってはとても大事な事だった。

あれから一週間が過ぎた。学校の大破は予想以上に大きく、一時休校となった。部室棟は爆発から逃れており、時人たちは以前と変わりなく使用している。マリアの遺産相続まで三十日を切っている。時人の様子がおかしかった。何を聞いても上の空で急に黙り

こんだりもしている。

時人は兄、時彦のことを考えていた。会ったことも、話したこともない兄。時人はある場所へと赴くことにした。

扉を開けると、いつものように一人の老人以外誰もいなかった。席に座り、注文をする。

「何の用かな？」

「兄貴のことを教えてくれないか」

老人は少し間をおき、ため息をひとつ。そして、店の奥へと消えて

いった。何分か経った後に一冊のファイルを持ってきた。それを時人に向け広げて見せた。

「これが時彦じゃよ」

その写真に映っていた男は時人そっくりだった。本人でも見間違えるほどに。無言で写真を見ている時人に老人は言った。

「お前たちは双子じゃ」

「どういうことだよ。アンタ、俺は独り身だって。それが『時の支配人』宿命だと言ったじゃないか」

「少し、お前たちについて話してやろう」

異能と呼ばれる中で最強の能力「時間支配」を操る一族。『時の支配人』彼らは世界に必ず、一人しか存在してはならない。一人の『時の支配人』が子供を産んだならば、それで先代の役目は終わる。自らの時を消滅させ、この世にいたことの痕跡をすべて消す。そして、残された子供は『時の住処』と呼ばれる代々、幼少時代の『時の支配人』を八つに成るまで育てられる。そして、成人になり、子供を産めば、そこで人生を終える。それが『時の支配人』の掟である。

しかし、ある特例のケースがある。それが双子の場合である。時人と時彦。彼らは初めての特例であった。その内容とは、どちら

か一方を「影」として、能力を剥奪し「陽」となるもう一方の『時の支配人』の支えになる事だった。

生後間もない時人と時彦。兄の時彦、弟の時人。先代は特例に従い、兄の時彦を「影」に選んだ。そして、二人を『時の住処』へと預けた。ただ、二人は会うことなく八つになるまで育てたのだ。

そこである異変が起こったのだ。時彦の剥奪されたはずの能力が甦った。しかし、時彦は「影」である。それは絶対に変わらない。

時彦はあくまでも時人を守るために存在する。それが時彦の心の中にあるのだ。

老人は話し終えた後にあることを伝えた。

「時彦は『時の眼』を開眼しておる。それも二つの支配とともに」

時の眼。『時の支配人』の能力を十二分に発揮する眼。通常の「時間支配」とは次元の違う四つの「支配」がある。それに一つでも開眼したものは無類の強さを誇ると言われている能力。

暗闇のさらに奥深くにある時彦の居場所。そこで空を見上げる時彦。そろそろ時人も目覚めるであろう。その時が来るまで少し暇つぶしを考えた。

時彦が向かったのはある男の元だった。その男は時人の命を狙おうと高等部の近くまで来ていた。

「ここにクロノスはいないぞ」

「誰だ？」

「お前を殺しに来た」

男はデクテット。　ノイン・リッターの和田博人。能力はなし。先程まで存在していた和田の能力は時彦によって消されていた。能力だけではなく自分の記憶までも消した。

これが「時の眼」の四つの「支配」のひとつ、「忘却支配」時を指定し、そこの起こった出来事を全て忘れ去る。

「お前はもう、自分が誰で何をするためにここに来たのかを忘れている。一生思い出すことはない。じゃあな」

時彦は廃人当然の和田をそのまま放置し、再び暗闇へと消えた。

頂点に君臨する者

男は苛立ちを隠せないでいた。いつも吸っている葉巻も全く手を付けていない。指で机を叩きながら考え事をしている。

男の前には残りのデクテットが揃っていた。そこには逢瀬と四法院の姿もある。

「お前らの誰でも良い。マリアを殺してこい」

逢瀬は耳を疑った。最初は拉致してこいとの命令だったはずがなぜ殺さなければならない。

「お言葉ですが、拉致してくれば良いのではないでしょうか？」

「逢瀬、お前が言えた立場かな？」

逢瀬は黙るしかなかった。任務を失敗したうえ、生きて帰ってきたことはデクテットとしても恥ずべき行動だった。

「解散しろ。そして、すぐにでも殺しに行け」

一人になった男の部屋に一本の電話が入る。

「帝、マリアはまだ死んでないの？もう時間がないわよ」

「わかっている。今、手配した。安心しろ、絶対に殺してみせる」

「期待しているわよ」

男は電話を置いた。扉に目を向けると逢瀬がいた。

「何をしている。早く行け」

「やはり、殺さなければいけないのでしょうか？」

「そうだ、これ以上生かしておくと我らにとって害になる」

逢瀬は空気を固めて、男に向けて放った。それは頬をかすめて壁にひびを入れた。

「何の真似だ」

「俺はこの仕事に誇りを持っています。それを女性を殺すことで汚したくはない」

「闘うというのか？」

「あぁ、お前を殺す」

逢瀬は帝に眼の前まで徐々に近づく。帝は動こうとはしない。

「『お前は俺を攻撃することはできない』」

「できるさ」

殴りかかろうとした逢瀬は違和感を覚えた。腕が上がらない。それどころか空気をうまく操ることもできない。その逢瀬の腹を殴る

帝。

「『お前は吹き飛ぶ』」

体の意志ではなく勝手に後ろの壁へと叩きつけられる。まるで、帝の言ったままに体が行動している。

「お前の能力では俺を殺すことはできない。わかったか？」

今は空気を練れる。空気を固めようとすれば空気がなぜか逃げていく。自分の能力なのに言う事を聞かない。帝が傍まで近寄ってきていて殴りかかったが、辛うじて避ける事ができた。空気を後ろに向けて放ち、自分の体を飛ばした。

「厄介な能力だな。『お前は自分の体を守ることができない』」

帝が近づき、蹴りを入れた。それが見事に体に当たった。今度は空気を練ることもできなくなった。段々とわかってきた帝の能力。

しかし、すでに遅かった。

「『お前はこれを避ける事はできない』」

帝の手にしたものは拳銃だった。そして、逢瀬の心臓めがけて銃弾を放った。逢瀬は何もできなかった。空気を練ることも逃げることもできずに銃弾が体にめり込むのを見る事しかできなかった。そして、目の前が真っ暗になった。

帝はもう動かなくなった逢瀬を見て笑った。大きく口をあけ、甲高い笑い声をあげながら。自分に適う者などいない。たとえクロノスだとしても。この「能力」こそ最強だ。

沙羅帝。能力は『言霊』言ったことがそのまま現実に起こる。

序列一番と「支配」の力

時人、聖児、アキラはデクテットの一人と対峙していた。男はいきなり現れて戦いを申し込んできたのだ。

「君たち三人がもし勝てれば、ある情報を教えてやろう」

「何の情報だ？」

「俺たちＭＡＲＢＬＥがマリア嬢を狙う理由だ」

三人の表情が変わった。それが一番気になっている事だった。しかし、この男はなぜか自信に充ち溢れていた。そうでなければわざわざ一人で戦いに来ないだろ

う。おそらくデクテットの

一人。それもかなり上位。

「君たちでは俺に勝てない」

「甘く見るなよ！」

時人がすかさず時を止め、男に切りにかかる。しかし、そこである異変が起こった。時が動き

出してしまった。時人が時を止められなかった。男は逆に時人を殴った。

やはり、と男は確信した。

「クロノスよ。お前は時を止められないようだな」

「本当か、時人」

時人は何も言えなかった。しかし、言わなくても聖児とアキラは理解できた。さっきの状態を

見ればおかしな時の動き方だった。

「どうする？最強の能力がないのに戦うのかな？」

「当たり前だ」

聖児は火の玉を数個、男に向かって投げつけた。男の直前で火の玉は消えた。一瞬で、そこに

何もなかったかのように消えた。男は少し微笑んでいた。男の後ろにアキラが迫っていた。

「氷れ」

男の足が地面とともに凍りつく。それでもまだ男の笑みは消えていなかった。アキラは思っ

た。まずは様子見だと。胴を切りつければ何かしら自分の能力での対処が見れる。そこから敵

を分析する。すかさず、斬りにかかるアキラ。だが、男の行動は意外なものだった。男が足に

ついている氷に手を添えると、またもや氷が消えた。聖児の火の玉を消したように、氷まで跡

形なく消えてしまった。さらに男がアキラの刀に触る。そして、刀

も消えたしまった。

「なに！」

アキラはそのまま蹴られて倒れてしまった。

「他愛ないな。もう終わりか」

時人は敵のことなどどうでもよかった。自分の能力が使えない。そのことに衝撃を受けたこと

が隠せなかった。

「大将は戦意喪失か。情けないな」

その通り、時人は構えも取らず立ち尽くしていた。しかし、二人は決してあきらめていない。

「咲け、崩炎華」

男の周りに炎で彩られた大きな花が咲く。その中心で焼かれ始める男。だがそれも一瞬で終わ

る。それすらも消えてしまったのだ。

「時人をバカにするな。殺すぞ」

すかさず、アキラも攻撃に移る。

「凍て奔れ、疾氷狼」

地面に手を付け、氷で造られた巨大な狼を男に向けて放つ。それでもなお、男の直前で消され

てしまう。

「もうわかっただろ。無駄なんだよ。お前達と俺の『能力』は違う次元だ。俺と対等なのはクロノス、お前だけだ」

しかし、時人は全く反応を示さない。

「最後に、自己紹介だ。デクテットのアイン・リッター、ヴァイスだ。力の序列は、一番。つまり、デクテット最強だ」

「嘘だろ、こいつが序列一番だと」

「ちなみに、能力は『万物消滅』だ。何でも消すことができる。こ

の手に触れたものは」

男はクロノスに向かって走り出した。しかし、その間に割って入る男が一人いた。

「『眼よ、二方の時を定め、支配せよ』」

「何者だ！貴様！」

ヴァイスは立ち止まり、いきなり現れた男に問いかけた。

「アンタは」

時人は目の前の人物に驚いているだけだった。その男は時人のほうを向いた。

「こうして面と向かうのは初めてだな、時人。俺とよく似ている」

「兄・・・さん」

時人の眼には涙があふれていた。理由は分からなかった。ただ、本能や直感が時人にそうさせたのだ。自分と兄の出生の秘密を知っている時人だから。

「お前の能力の使えない理由とマリアが狙われている理由を教えてやる。だが、その前に」

時彦はヴァイスのほうを見てこう言った。

「『時の支配人』に対する大罪を償ってもらおうか。雑魚よ」

「雑魚かどうか確かめるか？」

「よく見ておけ、時人。これが『眼の力』だ」

ヴァイスは時彦に殴りかかる。それを手で受け止め、もう一方の手でヴァイスの顔を覆う。

「腕ごと消してやる」

その言葉とは裏腹に手は消えていなかった。

「どういうことだ。能力が発動しないなんて」

「お前の『万物消滅』は確かにおれの手に起こっている。しかし、俺とお前、時人が体感している世界は通常の世界とは違う」

「どういうことだ」

時彦の眼が青白く輝いている。その瞳に吸い込まれるかの如く見入るヴァイス。

「この『時の眼』の『支配』のひとつ、『並行支配』により、俺たちのいる世界だけ時間の流れが遅くなっている。例えるなら、こちらでの十年は通常の世界にとって刹那よりも短い。故にお前の能力の発動過程が肉眼では捉えらないほど遅いという事だ」

「しかし、確実に腕は消えているという事だろう」

ヴァイスはさらに力を込める。時が遅いのなら、何か所も消滅すれ

ば良い、という考えだ。

「その前に終わる。『眼よ、彼の者に永遠の忘却を与えよ』」

顔を覆っている手のほうから小さな波動が起き、それがヴァイスの体を駆け巡る。ヴァイスの

拳を離し、覆っていた手も退ける。ヴァイスは時彦との距離をとる。

「お前はもう終わりだ。俺の能力・・・・・・・あれ？」

ヴァイスは急に頭を押さえこんだ。そして、何かを呟きはじめた。

「俺の能力は何だ？なぜだ。思い出せない」

「お前の記憶にある『万物消滅』に関する全ての時を消した。もう、思い出すことはない。これが『忘却支配』だ」

時彦はヴァイスの鳩尾を殴り、そのまま気絶させた。そして、時人のほうへと近寄る。

「これから話すことは誰にも言うな。マリア本人にもだ」

「わかった」

そして、時彦は時の遅い世界でゆっくりと時間をかけながら説明を始めた。

『並行支配』通常の世界とは別に時の時間感覚の違う世界を作り込み、指定した人物だけを取り込む。また、対人も可能である。

『忘却支配』その人物に関連のある対象を記憶した時間などを消し去る。永遠もあれば一時も

ある。また、その対象全ての記憶の時間を消すこともできる。

過去の記憶

聖児とアキラは微動だにしない。時彦の「並行支配」が続いている証拠だ。

「マリアの姉を知っているか？」

「遺産相続の件でもめているって聞いたけど」

「マリアの姉二人はＭＡＲＢＬＥと繋がっている」

「え？」

「経緯は知らないが、ＭＡＲＢＬＥが日本の警察を動かせるのも姉達が資金のバックアップをしているからだ」

納得のできることだった。今も警察は何もしていない。時人たちに

関しては全てＭＡＲＢＬＥに任せているということだ。

「だが、そんな奴らにも計算外な事が起きた」

「マリアへの遺産相続」

「そう、姉の資金源は莫大な財産にある。フランス一の資産家であるマリューセル卿の。それが断たれれば姉はもとい、ＭＡＲＢＬＥの資金源も無くなる」

「そうなれば警察にも関与できなくなるという訳か。でも、都合良くないか？それに何で末のマリアに遺産相続なんて」

「全て、俺が仕向けたことだ」

話は時彦とマリアが会う時へと逆行する。

時彦が十五の時。自分が影であることを知り、正式な「時の支配人」である時人のために存在するという宿命にも気付いた。そしてその時彦が最初に行った行動が、いずれ弟の時人が

「時の支配人」になった時の最大の障害になるＭＡＲＢＬＥの壊滅だった。ＭＡＲＢＬＥの存在自体を知らずに時人が過ごせればそれで良かったが、壊滅は難しいと悟った時彦はＭＡＲＢＬＥの周辺事情について調べる事にした。そして、ある一つの繋がりを発見した。それがマリューセル家とのものだった。

ＭＡＲＢＬＥは資金の八割をマリューセル家の財産に頼っていることもわかった。つまり、マリューセル家との関係を断つことができればＭＡＲＢＬＥの力は激減すると考えた。ＭＡＲ

ＢＬＥとマリューセル家での繋がりは当主のマリューセル卿ではなく姉二人によるものだった。

時彦はマリューセル家のボディガードに雇ってもらい、姉二人について詳しく調べる事にした。そこで知ったことは三つ。

一つは、マリューセル卿の財産を巧みに操り、気付かれないように身内すらも騙して資金を送っていること。

そして二つ目。これが一番厄介だった。姉二人の下にはもう一人三女がいるらしく、その三女・マリアの命を姉二人は狙っているのだ。理由は簡単なもので万が一を考えたとき、遺産を相

続させる訳にはいかないというものだった。

三つ目もかなり危ないものだった。姉の二人は父の食事に微量の毒を混入し続けていること。この毒は一食二食なら問題ないが長期的に飲むと死に至る毒だった。これを時彦の来る二年前から続けていた。そのせいでこの頃からマリューセル卿の容態も悪くなっていたのだ。

時彦のやるべきことは決まっていた。マリアを姉二人の手から全力で守ること。この頃の時彦は「時の眼」を開眼しており二つの「支配」も手に入れていた。その能力のお陰でマリアの命を救う事も出来た。姉達からの非道から守り続けてマリューセル卿にも信頼される存在になることができた。

ある日の夜、マリューセル卿の寝室へと邪魔をした時彦。そこであることを伝えた。それはマリアの命を狙っているのが二人の姉だという事。姉がマリューセル卿に毒を盛って病気にし

たこと。マリューセル家の財産を横暴していること。それを聞いたマリューセル卿はひどく悲しんだ。そこに時彦はある提案を促した。その提案のお陰でマリアが遺産相続をすることにな

った。

そして、時彦はマリューセル家から姿を消す決心をした。その前日にマリアとある約束をした。それが時人を訪ねること、そうすれば必ず助けに行くことをマリアの間で約束した。

物語はここから再び時を刻み始める。終わりに向かって。

最終決戦

時彦が「並行支配」を解いた時には時人の目の前には時彦とヴァイスの姿はなかった。アキラと聖児の前に現われてこれまでの経緯をすべて話した。もちろん、秘密以外のことをだ。

「マリアを守ってやってくれ。おれもできる限りのことはする。あと十日もない状況だ。

頼んだぞ。三人とも」

時彦は姿を消した。その後ろ姿は寂しそうだと時人は感じた。

帝は焦っていた。もう取り返しのつかない事態まで迫っていた。先日、ついにマリューセル家の遺産がマリアのものとなったとのニュースが流れた。残るデクテットも五人。半分失い、さらにアインであるヴァイスが死んだことは大きかった。

「もうよい、全て失敗だ。しかし、まだやることは残っている」

これから五人と帝はある凶行に出ることになった。

文化部の部室のニュースが流れていた。そのニュースは世界の常識を全て覆すような出来事だった。

『全国の警察官による殺人、強盗、誘拐などの連続事件勃発』

昨日の夜に起きたことだった。それは言葉では表せられない。凄惨な光景の数々だった。しかし、妙な事が起こっている。夜の内に様々な犯行が行われた。しかし、朝方になると、その犯人たちは誰もが自分の容疑を否認している。全員が夜の記憶を無くしているというものだった。その直後、時人は眩暈に襲われ倒れ込んでしまった。

目を開けると、時彦が椅子に腰かけているだけの光景の前にいた。

「すまない、時人。大事な事を言い忘れていた。お前の能力についてだ」

「兄さん。今、大変なことが」

「わかっている。しかし、お前の能力のほうも大事だ」

「・・・・・わかった、教えてくれ」

「お前はもうすぐ『時の眼』を開眼する。それがいつか分からないが、『支配』とともに開眼することになる。それと、この事件の仕業はＭＡＲＢＬＥにある。ここに行け」

時彦が時人の頭に手を添えて情報を伝える。自分の経験した時を分け与えることができるのだ。これは双子の独特の能力。そして、元の世界へと時人は戻る。そして、時彦の教えてくれた場所へと仲間とともに行くことを決心する。

時彦の教えてくれた場所は都心の中央部にそびえ立つ警視庁本部。そこの眼前にいる四人。

「デクテットは五人。俺たち全員を合わせると一緒だ」

「一人足りてないぞ？」

「あと一人には当てがある。期待してくれ。全員、生きて帰ろう」

四人は中央で手を合わせて再び会うことを誓う。それぞれが別々の場所から頂上を目指し走り始める。

紅色の氷と蒼き炎

アキラは部屋を開けて異変に思った。大きな部屋だが、何も置いていなかった。その部屋の奥に男が一人。壁には窓すらない奇妙な部屋だった。

「ようこそ、デクテットのズィーベン・リッター、来宮愁だ」

「さっそくで悪いが、殺す」

「君にはできない。絶対にね」

アキラは男の元へと走り出す。刀はないが、氷は出せる。これで仕留める。しかし、アキラと来宮の間に一つの影が割り込む。その陰に見覚えはあった。そして、急に立ち止まる。目の前には香奈がいた。眼には生気がないように光を失っていた。香奈を見ている

と、急に激痛が体を襲った。銃で何発も打ち込まれてしまった。急所には当たっておらず、意識はあった。しかし、体が動こうとはしなかった。急所は外れたものの、肩と膝を打ち抜かれていてまともに動く状態ではない。口からも吐血を出してしまう。

「弱い男だ。知人は殺せないか？」

「き・・・さま」

呼吸も苦しくなり、立つことは許されない状況。圧倒的にピンチである。

「警察の事件知っているだろ？あれは俺の仕業だ。俺の能力は『人形絡繰』でね。人を操ることができるんだよ。君はこの女と仲が

良いらしくてね、盾にしてもらったよ」

「外・・・・道が」

「もう無駄でしょ。息すら苦しい感じだから楽に殺してあげるよ」

来宮は徐々に近づきこめかみに銃を突き付ける。

「これで終わりだね」

しかし、銃は発砲すること無く、その代わりに何かが床に落ちた。来宮の指であった。引き金に添えられていた人差し指だった。来宮の断末魔が部屋中に響く。アキラはゆっくりと立ち上がり銃を奪った。アキラの傷口からは血が出ているがそれは不規則な動きを

見せていた。

「お前、まさか自分の血を」

「そうだ、氷の元である水だって操れる。血だって同じだ」

来宮は切り口を押さえて後退してゆく。それをゆっくり追うアキラ。来宮の後ろから警官が続々と現われ始めた。来宮が能力を発揮させた。

「もう終わりだ」

アキラは銃を壁に向かって可能な限り打ち続けた。その後、自分の体から流れている血を集めて塊に凝縮させその壁に向かって投げ

つけた。銃弾によりヒビが入っていた壁は音を出して崩れ始めた。
その先からは太陽の光が差し込んでいた。

「しまった！」

「やはり、太陽が弱点か」

夜の記憶を忘れている。朝になると来宮の能力が消えていることから、太陽の光を与えれば能力の支配から解放されるということだった。集まっていた警官も香奈も気絶して倒れ込んだ。

「この死に損ないめ、殺してやる」

「もういい、凍え眠れ『無限氷結界』」

来宮の周りに血で造られた氷の結晶が生まれた。その中央で凍りつく来宮。しかし、アキラの足は動く気配が無かった。そればかりか、意識が朦朧としてきており今にも倒れそうだった。必死に足を動かし部屋を出て壁にもたれかかる。体からは止めどなく血が溢れてきている。アキラの心の中には時人がいた。その時人は笑っていた。アキラも笑おうとするが、口から血を出してしまう。壁にもたれていたが、そのまま地面へと倒れてしまった。

それからアキラは動かなくなった。

聖児には嫌な予感がしていた。できることなら全員が生きて帰れることを願っていたが、どうやらそれは無理と感じていた。

目の前にいる男、ツヴァイ・リッターの相川骸。この男の能力により、かなりの重傷を負ってしまった。

「くそ、厄介だな」

壁に寄りかかり辺りを見渡す。あの能力は自分とは相性の悪い能力だ。距離をとり、様子を見るしかない。

「諦めろ。お前と俺じゃ格が違う」

後ろの壁が大破して衝撃で飛ばされる聖児。壊れた壁の向こうには骸がいた。聖児は火の玉を数個飛ばす。骸は手を交差させ火を振り払うように大きく広げた。そして、火が消え聖児の体を切り刻む。無数の見えない刃が聖児の体を襲った。見えない刃の正体は骸の能力にある。

「真空手刀」無数の刃を手から繰り出す。その刃の速度などにより風を巻き起こし火が消されてしまうのだった。

戦いの始まりから何度も斬撃を受けている。聖児の攻撃はまだ一度も当たっていない。聖児はその後、思い切った行動に出る。火を周りに付け始めたのだ。

「お前、正気か」

「もっとだ。もっと、火を」

聖児は骸のことなど気にも留めずに周りに燃やし続ける。骸は聖児に刃を飛ばす。聖児の体を切り刻もうと聖児は燃やし続けた。そして、全てが燃え上がり、煙も充満してきた頃だった。聖児は骸のほうを向き、手を広げて見せる。

「いけ、豪炎翔」

その直後、あれほど燃えていた部屋の炎が聖児の手一点に集まっていた。そして、それは骸めがけて飛んで行った。骸は風圧で消そうとするが全く消えない。

「消えろ！千扇烈風」

手から発せられた大きな風と斬撃により、部屋は地面や壁に亀裂が走り、先程まで燃えていた用具すらも跡形なく壊れていた。しかし、そこに聖児の姿はない。骸の眼前まで迫っていた。あの大きな火の塊は近づくための囮だった。聖児は一瞬早く骸に火を付けた。しかし、骸は燃えていながらも、聖児の腹を手刀で貫いた。直後、聖児の口から大量の吐血がでる。

すでに燃え尽きた骸と腹を押さえる聖児。

「まいったな。完璧に穴があいている」

そして聖児は目をゆっくりと閉じ、倒れてしまった。

機械仕掛けの神

アネモネはエレベーターで最上階を目指していた。しかし、エレベーターは最上階の一歩手前の二十五階で止まった。扉が開き、奥に男が一人。

「早くそこから離れな。爆発するぞ」

アネモネはあえてそれに従い、エレベーターから降りる。そして、二三歩歩いた直後に後ろで爆発が起こった。振り返るとエレベーターは燃えていた。

「この先からは階段で行ってもらおうか。ただし、階段への扉の鍵は俺が持っている」

男は懐から鍵の束を取り出す。それを後ろへと放り飛ばす。

「デクテットのフィア・リッター、四法院仁だ。能力は『爆発』だ。よろしく」

「わかりました」

アネモネは四法院との距離をとりながら様子を見ようとしている。四法院はポケットから何かを取り出した。テニスボールだ。それを数回上にあげてこちらを見ていた。そして、テニスボールをこちらに向かって投げつけた。アネモネはそれを避けようとした直後に突然、テニスボールが爆発をした。その爆風で倒れ込むアネモネ。倒れた先にテニスボールが数個転がっていた。そして、それも

次々と爆発を起こしアネモネを襲う。しかし、アネモネは手で顔を隠していたため、さほどダメージは受けていない様子だった。

「さすが、機械だけあるな。けど、それもいつまで耐えられるかな？」

四法院は次々とテニスボールを投げつける。それが爆発する前に何とか逃げるアネモネ。しかし、爆発は止むことなく続いている。

逃げているだけに夢中になっていたアネモネの目の前に四法院が現れる。手を広げるとそこには何十もの小さいボールがあった。スーパーボールだった。それがアネモネの目の前で爆発する。

爆発が爆発を呼ぶ大爆発となった。壁も衝撃で壊れている。アネモネも同じだった。爆発の中心にいたため全ての爆発を受けてい

た。そのせいで、腕は大破寸前だった。足も壊れかけている。

「もう終わりか、諦めるか。俺だって女は殺したくないね。たとえ機械でも」

「優しいのですね。でも、時人さんと約束しましたから。必ず勝つと」

この戦いでは水華は指示をしなかった。それはアネモネの願いでもあったからだ。自分の力だけで闘ってみたい、時人の役に立ちたいという願いだった。その願いもあって通信を切っていたアネモネが水華に向けて、連絡をとった。

「マスター。私を作ってくれてありがとうございました。さようなら」

「おい、どういう事だよ。いきなり連絡してきて何言ってんだよ」

それに応えることなくアネモネは通信を切った。これが最初で最後の希望。自分に残された最後の。アネモネは自分の心の中でのスイッチを入れた。

「もう、いいだろ。諦めて帰るなら命だけは助けるぞ」

「大丈夫です。もう終わりますから」

アネモネは体内にとりつけられた安全装置を外したのだ。一般の人間の生活に溶け込むために全体の八割をカットさせて生活してき

たアネモネ。

「安全装置解除完了。目標確認。これより排除を決行します」

壊れかけていた壁の一部を剥ぎ取り四法院に向かって思い切り投げつける。四法院は避けることは出来たが、そのパワーに驚いた。

どこに隠されていたのか。

「まったく、面倒な相手だ」

次々と手当たり次第にモノを投げつけるアネモネに向かい、ナイフを数十個連続で投げつけた。それはアネモネに突き刺さり、その直後に爆発を起こした。しかし、アネモネはまったくダメージを受けていなかった。そればかりか更に勢いが増したぐらいだった。

四法院は周りに叩きつけられた壁の破片で逃げ場がないことに気付いた。一瞬、アネモネから目を離した時、それをアネモネは見逃さなかった。一瞬で間合いを詰め、四法院に殴りかかる。何度も何度も。地面にもその衝撃が伝わるほど、重く、強い殴打だった。

四法院が動かなくなったことを確認したアネモネは立ち上がり、鍵をとり、階段に向かって歩き出す。しかし、四法院はそれを許さなかった。何とか意識を取り戻し、最後の力を振り絞り、地面を爆発させた。

「言っておくが、ここは行き止まりだ。その先には何もない。それにここには爆薬がたくさん詰まっている。それに引火すれば終わ

りだ」

アネモネは階段を上がろうとしたが、その先は行き止まりだった。戻って部屋を見渡してもどこにも逃げ場はなかった。爆発が次々と起こり始める。必死に出口を探すが見つからない。エレベーターは破壊され壁は大破。アネモネは歩きだそうとしたが、不意に膝を付いてしまう。思うように体が動かない。安全装置を外すことに慣れてなかったからだ。必死に生きたいと思ったが、それは無情にも爆発により掻き消されてしまったのだ。

やがて部屋全体を大きな爆発が襲った。

時人は大きな爆音を聞いた。携帯が鳴る。水華からだ。

「どうした？何かあったのか？」

「アネモネが死んだ。そっちで大きな爆発とかなかったか？」

「ついさっき」

「そこにアネモネがいたんだ。おそらく助からないだろう」

時人は携帯を地面に落した。そのせいで携帯は壊れて水華との連絡も絶たれてしまった。後ろに気配を感じた。デクテットの一人か

と思ったが時彦だった。

「残るデクテットは二人だ。このまま急ぐぞ」

しかし、時人は動こうとはしなかった。アネモネの死が受け入れることができなかったのだ。そんな二人の前に一人の男が現れた。

「さすが、『時の支配人』だ。ここまで来るとはたいしたものだ。

でもここが終点だ」

「お前はデクテットか？」

「あぁ、ドライ・リッターの氷川了だ。能力はいずれわかる」

氷川は手を地面に置き、何かを呟いていた。時彦は関係ないように斬りかかろうとする。時を止めることはない。一撃で終わらせる。切った瞬間、時彦の刀は地面を切っていた。しかし、氷川は時彦ではなく、時人に向って走り出した。時人は時を止めようとする。しかし、まだ止めることはできなかった。

「どうした！時人。時を止めろ！」

できない。それに足が変だった。足の太ももまでが石と化していた。動けない。

「無理に動くなよ。俺の『石化』からは逃げられないからな」

「まさか、まだ時を止めることができないのか？」

明らかにおかしかった。もうとっくに能力、「時の眼」に目覚めてもおかしくなかった。時彦は時を止め、男に斬りかかった。

「大丈夫か、時人」

時彦は時人の足の時間を戻して元通りにした。

「すまない、兄さん。まだ、能力に」

「わかっている。だったら一刻も早く終わらせよう」

二人は階段に向かって走り始めた。時彦が後に続く形で走っていると時彦の背中に激痛が走る。

「どうした、兄さん」

後ろにいたのは氷川だった。死んでいなかったのだ。あの時切られたのは石で作った人形らしく本物が時彦の背中に刃を刺している。

「死にやがれ！」

「『彼の者の全てを消し去れ』」

時彦は氷川の記憶を全て跡形もなく消した。その後、氷川は気絶してしまった。

「大丈夫か、兄さん」

「時人、ちょっと来い」

時人は何も言わずに時彦のそばへと近寄る。時彦はそっと、時人の眼を覆った。

「俺の『眼』をやる。それでお前能力は戻る筈だ」

「でも、兄さん」

「俺のことなどどうでも良い。お前が『時の支配人』なんだ」

その言葉は時人の心の中に重く残った。小さく頷いて階段を駆け上がった。この事件の全ての元凶である男の元へ。

時彦の視界には男が一人。

「あなたが、クロノスですか？」

「あぁ、そうだ」

「私はデクテットのゼクス・リッターである・・・・・何者でしたっけね？」

「俺が知っていると思うか」

時彦は力を振り絞り、刀を男の喉元を刺した。最後の、自分の命を削って使った最後の『支配』

最後の男と支配

時人は全ての元凶の男。沙羅帝の前にいた。

「流石は、『時の支配人』と言ったところか。しかし、ここに来た君の仲間は君以外全員死んだ。それでも私と戦うのか？」

時人は無言のままだった。時人の周りに何かが漂っていた。帝はナイフを数本取り出しそれを見せつけながらこう言った。

「『このナイフを避けることはできない』」

帝はナイフを投げた。それはなぜか時人の手がしっかりと全部掴んでしまった。反射の速さといい常人離れしているものであった。

だが、帝は目を疑った。時人の手が両方ともぶら下がったままであるのだ。それにもかかわらずナイフは手で掴んでいる。あれは誰の手だ？その手の先は時人の背中に隠れて見えない。幽霊のような、背後霊のどちらか。

「『お前はナイフに触れることはできない』」

もう一度、試してみることにした。帝は自分の能力に自信があった。「言霊」この能力こそが「時間支配」よりも最強であると自分でも思っていた。ナイフを今度は先程よりも多く投げつけた。今度は時人の背中から両方の手が現れてナイフを殴り、地面に叩きつけたのだ。

「触ることはできなくても。殴ることはできるぜ」

時人の後ろから何かが現れた。それを見た瞬間、ある感覚が帝を襲った。その後、辺りが何もなくなり、漆黒の世界へと姿を変えた。

「何だこれは。『元の世界へ戻れ』」

帝の「言霊」の能力が通じていなかった。

「ここは、『時の世界』だ。主が俺を目覚めさせてね。この世界では一切の能力は封じられる。この世界では俺の主が神だ」

「ふざけるなよ。こんな世界など抜け出してやる」

「無理だ。ある条件を解かない限り。ここから抜け出せられない」

「ある条件だと」

「アンタが死ぬことだ」

「なんだと」

帝の背後に時人が迫っていた。振り向いた瞬間、顔面に重い一撃を喰らわされた。その衝撃で遠くへ飛ばされる帝。

帝が気付くと、時の世界とは違う世界に来ていた。

「ここは」

正面には直角で左右に別れ道が続いている。その先を見てみると、今度は三方向に道が分かれている。反対側も同じ様にいくつも別れ道ができていた。

「ここはどこなんだ。訳が分からない」

「ここは『時の迷宮』だ」

時人の後ろから現れた何かが時人ともに、また現れた。時人は黙ったままこちらを見ている。そして、何かはこの世界の説明を始めた。

「この迷宮の行き止まりには様々な死を体験できる時間がある。それらに出会うことなく無事にゴールにたどり着ければここから出られる。という仕組みだ。慎重に進めよ。少しでも行き止まりを見たらアウトだからな」

帝は歩きだす。ひとつ、ふたつと分から道を進んだあと、曲がり角を曲がってみると、行き止まりだった。そして、その壁には一枚

の張り紙が

「焼死」

それだけ書かれた紙を見た瞬間、帝の体を火が襲った。

「なんだ。いきなり」

暑さと息苦しさに悶えながら帝はその場に倒れ、死んだ。

目が覚めた帝はまた、時人と何かに出会った。その何かが、帝に近付いてきた。

「残念だったな。行き止まりに行ったか。紙に何て書いてあった？」

「焼死とだけ書いてあったぞ。その直後、俺は炎に襲われて・・・・」

帝は何かに気付いたように顔を青くした。何かもそれと同じくして笑みを漏らした。

「気付いたかな。この世界の行き止まりは、人生の行き止まりと同じだ。様々な死に方をした人間の、記憶した時間が紙とともに宿

っている。そして、その紙を見た人間にその力が及び、同じ死に方を体験する。しかし、ここは『時の支配人』が作り出した世界の

迷宮。死ぬ間際、本当に一瞬前にお前の時間を巻き戻し、この場所、つまりスタート地点まで戻すわけだ。もちろん、体験したこと

や記憶はそのままだ。お前は『焼死を体験した後にスタートからやり直し』という状態に戻るんだ。わかったかな」

「つまり、ゴールするまで様々な死を味わうという事か」

「ご名答。じゃあがんばれよ」

「貴様！何者だ」

「俺は、時人の、『時の支配人』の『時の眼』の最強の『支配』である『暴走支配』だ。お前の時とそこらじゅうに転がっている時を混ぜ合わせてこの空間を作った。そして、主がこの世界で眼を覚めることはない。俺という『暴走支配』が神経を支配しているから」

そう言って暴走支配は時人を連れて消えてしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5656f/

クロノス～時の支配人～

2010年10月13日04時35分発行